

小・中学生の生活についてのアンケート調査

実施報告書

令和5年3月

彦根市子ども未来部 子育て支援課

目次

1	調査の背景および目的	1
2	調査の対象および方法	1
2.1	調査対象.....	1
2.2	調査期間.....	1
2.3	調査方法.....	1
2.4	回答数	2
3	調査の結果（単純集計）	3
3.1	基本情報.....	3
3.2	お世話している家族がいると回答した児童.....	14
3.3	お世話している家族がいないと回答した児童	30
4	調査の結果（追加分析）	39
4.1	家族構成とお世話の状況	39
4.2	家族の世話の有無と生活状況	40
4.3	性別による世話の状況の違い	44
4.4	家族構成による世話の状況の違い.....	46
4.5	世話の頻度による生活状況等	49
4.6	世話の頻度による世話の状況等	52
5	調査結果の考察	53
5.1	調査結果のまとめ	53
5.2	総括	56
5.3	今後の取組と課題	57

1 調査の背景および目的

近年、子どもを取り巻く課題として認識されてきているヤングケアラーは、本来大人が担うような家事や家族のケアを、子どもがその年齢や成長に見合わない重い責任や負担を負って日常的に行うことで、その育ちや教育に影響を及ぼすとされています。

しかしながら、ヤングケアラーの課題は家庭内のデリケートな問題が絡んでいること、さらには本人や家族に自覚がないといった理由から、支援が必要であったとしても表面化しにくい状況があるとも指摘されています。実際、本市が把握しているヤングケアラーと思われる児童数は、国や近隣府県が行った調査結果と比較すると非常に少なく、他に相当数のヤングケアラーが内在すると考えられます。

これらを踏まえ、ヤングケアラーとなっている子どもやその家庭に効果的な支援を行うためには、その現状を把握し、必要とされる支援内容を明らかにすることが不可欠であることから、次項以降のとおり実態調査を行ったものです。

なお、アンケートの実施に当たっては、国調査結果との比較を容易にするためにも、国調査と同様の質問内容を基本としました。

また、アンケートでは「ヤングケアラー」の言葉をあえて使用せず質問をしています。これは、「ヤングケアラー」という言葉を知らない児童がいることや、逆に意識しすぎて本意と違う回答をすることがないように、回答する児童の心理的負担を小さくするため、国調査と同様に「生活についてのアンケート」として実施しました。

本報告は、このアンケート結果から、本市でヤングケアラーと思われる児童の把握を行ったものの結果報告となります。

2 調査の対象および方法

2.1 調査対象

市立小学校に在籍する小学5年生～6年生	2,148人
市立中学校に在籍する中学1年生～3年生	3,019人
計	5,167人

2.2 調査期間

令和4年9月26日（月）～同11月15日（火）

2.3 調査方法

無記名式アンケート（学校において調査期間内に一定の時間を取っていただきタブレットを活用した電子アンケートを実施）

※一部、タブレットの使用が困難な児童においては紙面によるアンケートを実施の上で合算した。

2.4 回答数

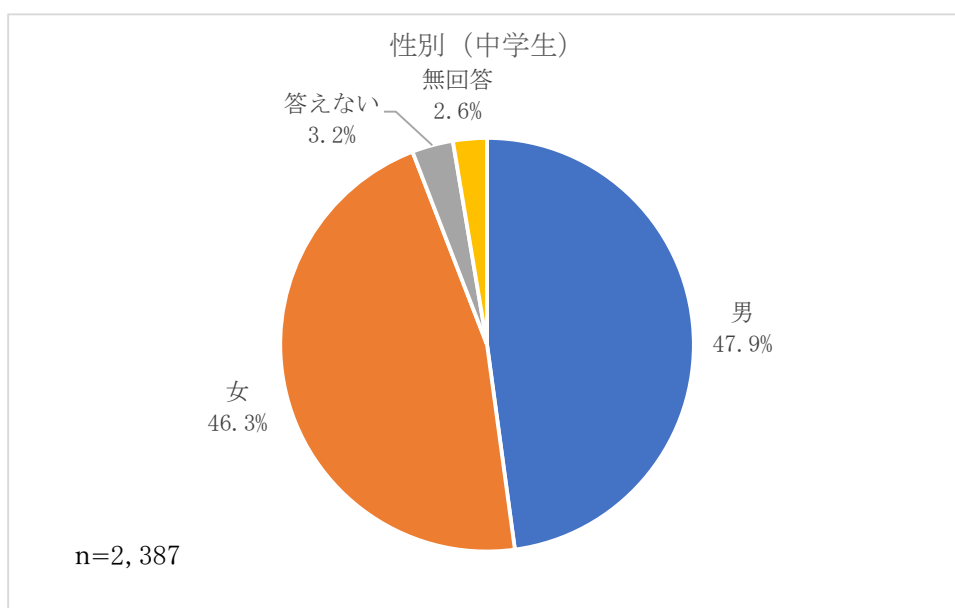
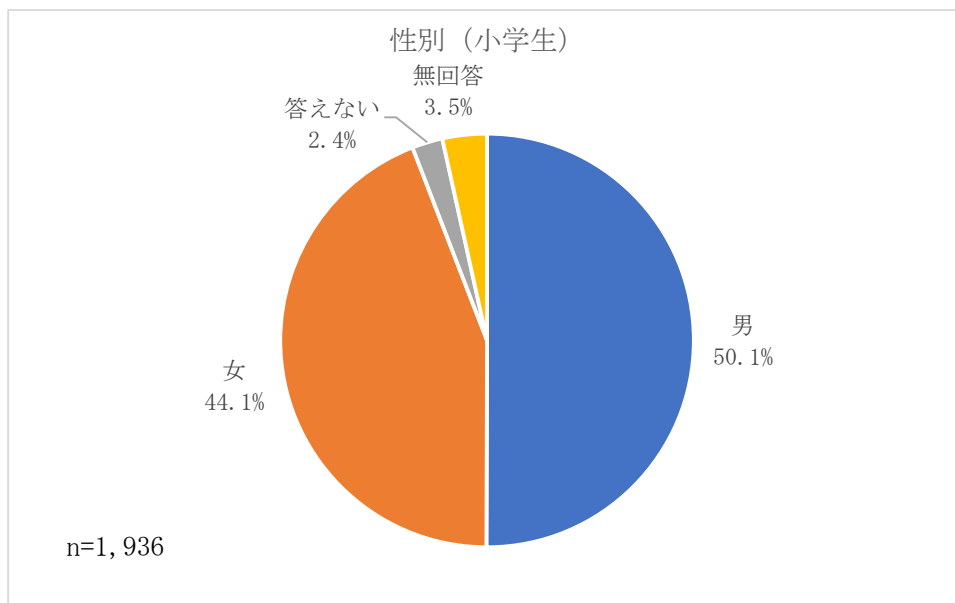
市立小学校に在籍する小学5年生～6年生	1,936人（回答率90.1%）
市立中学校に在籍する中学1年生～3年生	2,387人（回答率79.1%）
計	4,323人（回答率83.7%）

3 調査の結果（単純集計）

3.1 基本情報

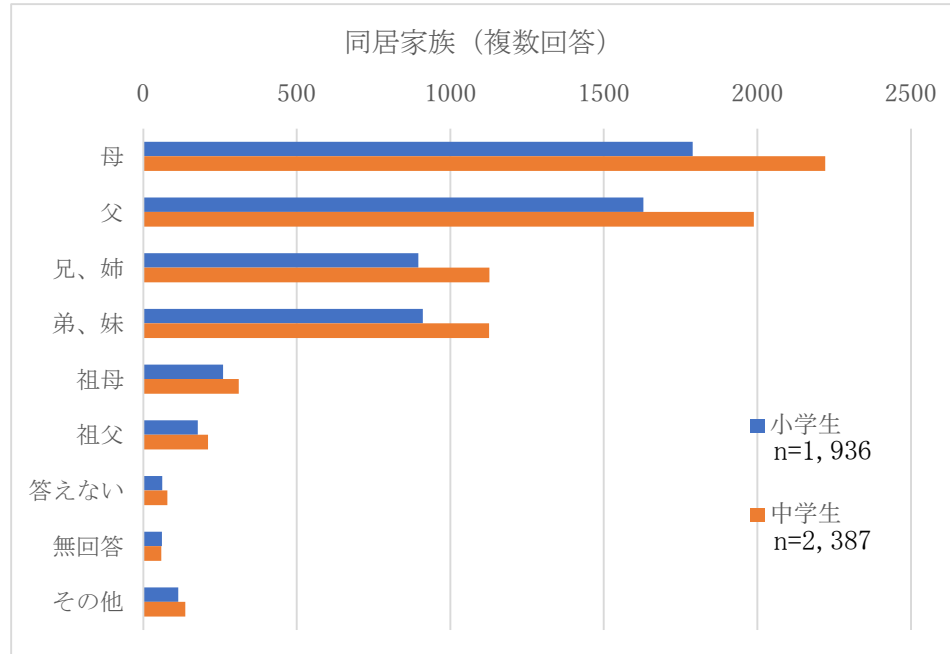
3.1.1 性別

回答者の性別は次のとおりです。



3.1.2 同居家族

同居家族はいずれも「母親」が最も多く、次いで「父親」が多くなっており、「兄、姉」、「弟、妹」はほぼ同数です。

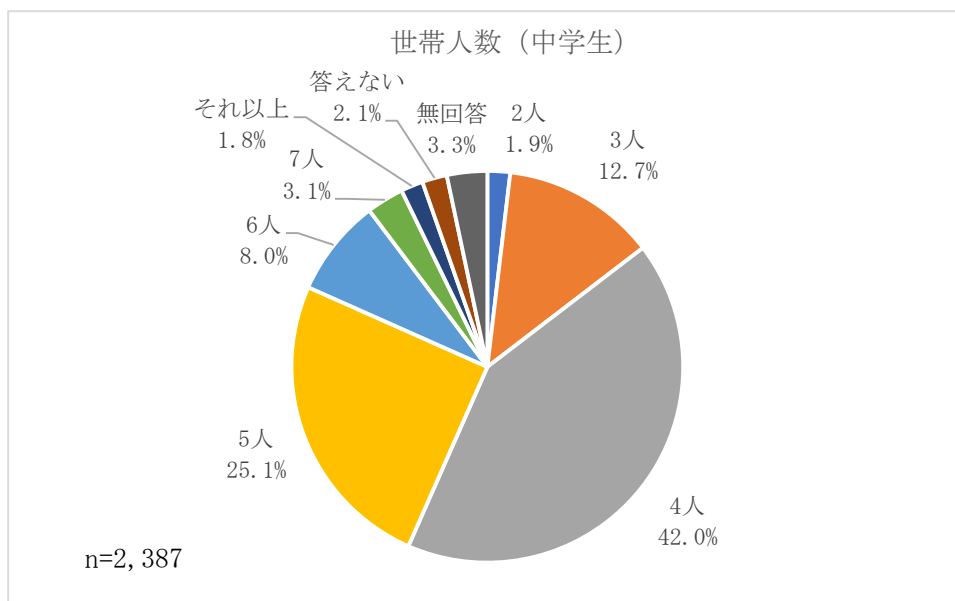
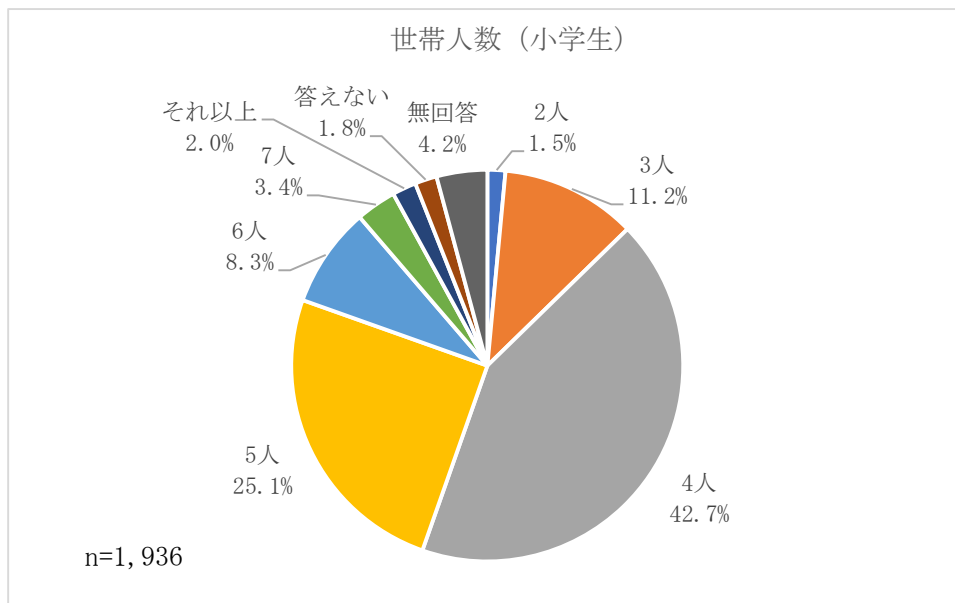


○「その他」の内容 (抜粋)

「母のパートナー」、「おじ・おば」、「甥・姪」、「いとこ」、「曾祖父母」

3.1.3 世帯人数

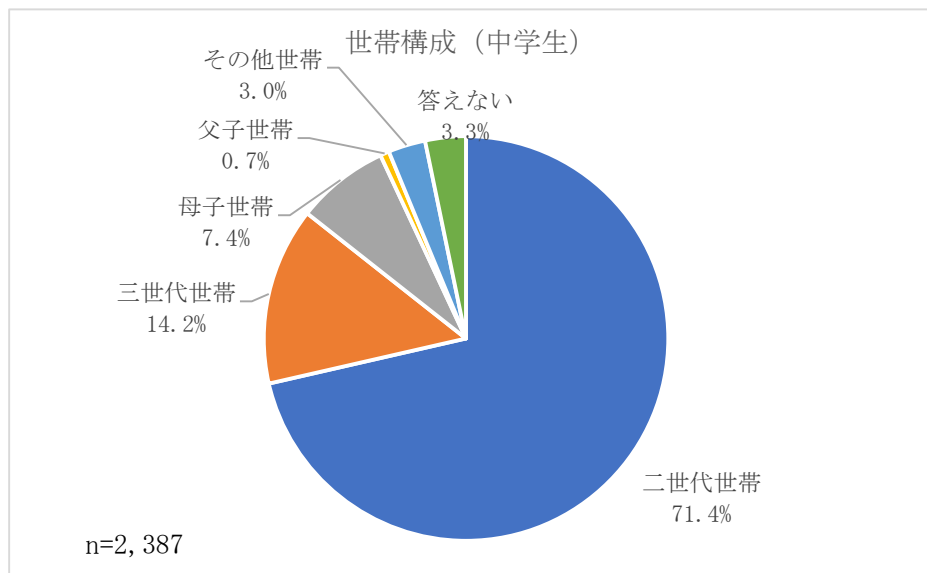
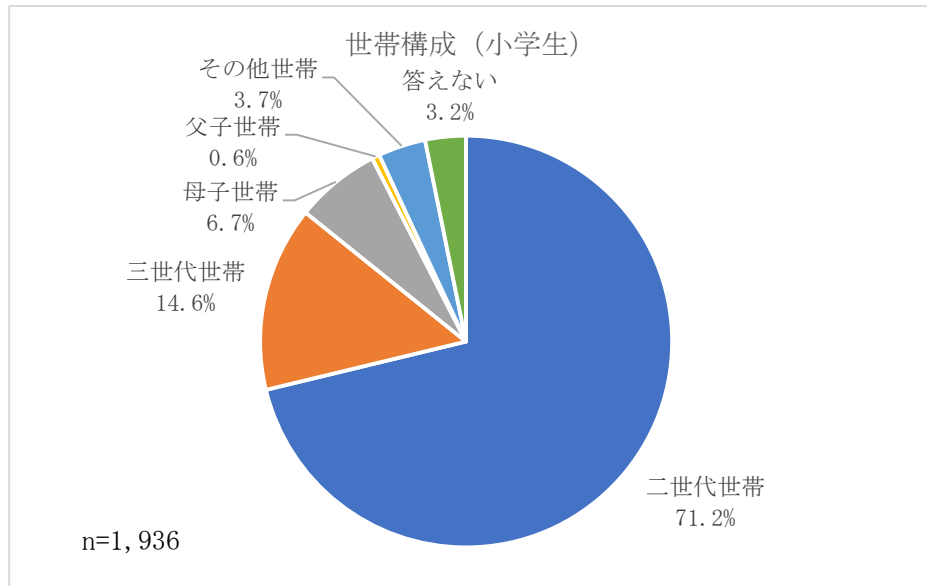
世帯人数はいずれも「4人世帯」が最も多く、次いで「5人世帯」、「3人世帯」となっています。



3.1.4 世帯構成

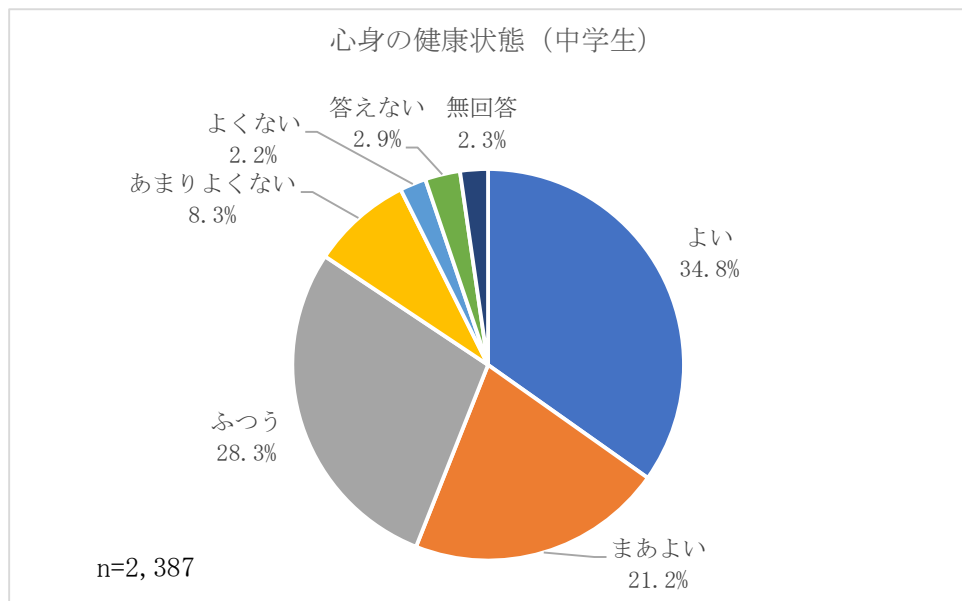
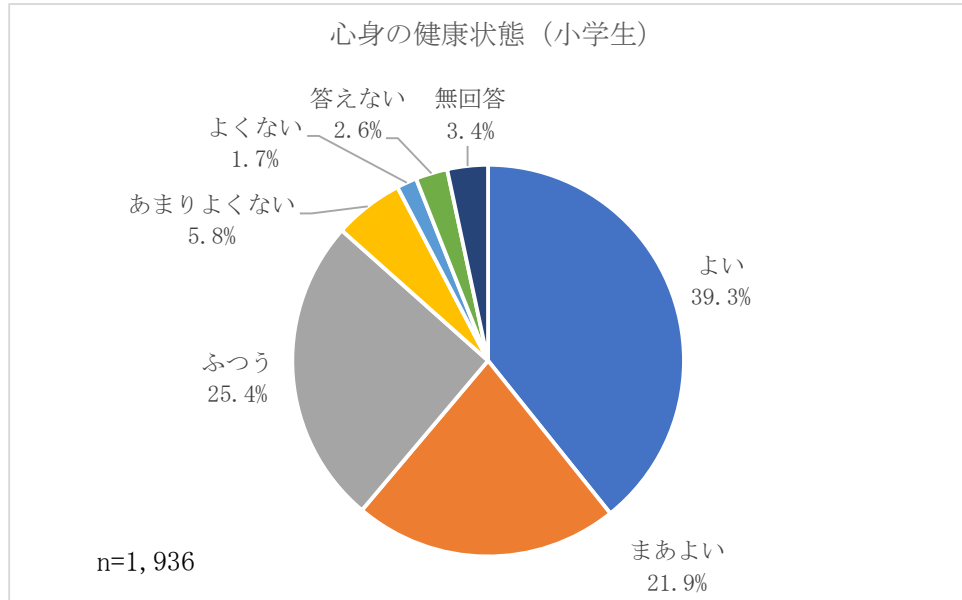
直接、世帯構成を尋ねる設問はありませんが、同居家族を尋ねる設問の回答を基に世帯構成を推計した結果は次のとおりです。（両親が婚姻関係を継続していた場合も、別居している場合は母子世帯、父子世帯として計上されている可能性があります。）

いずれも、二世帯世帯が最も多く、次いで三世帯世帯、母子世帯の順です。



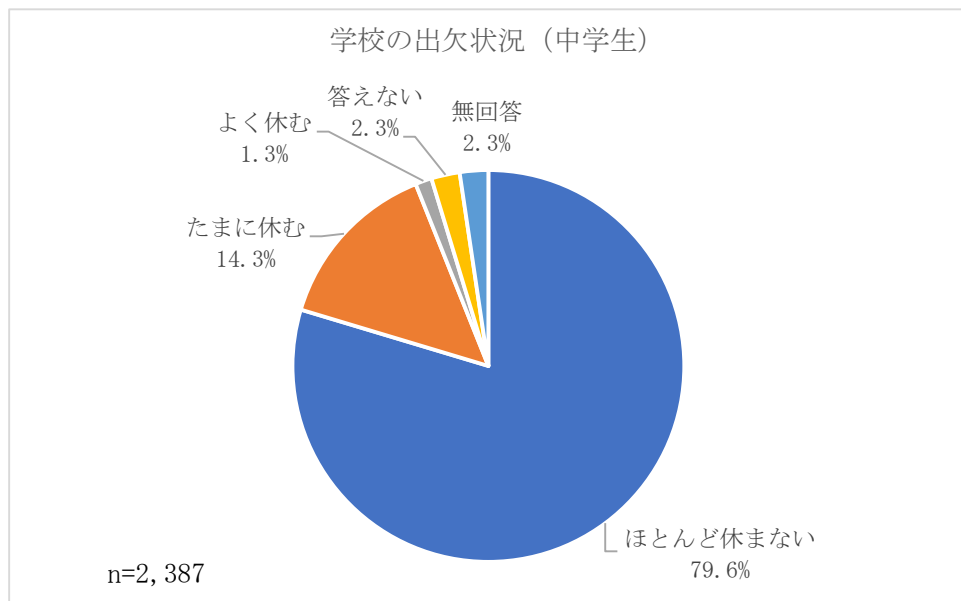
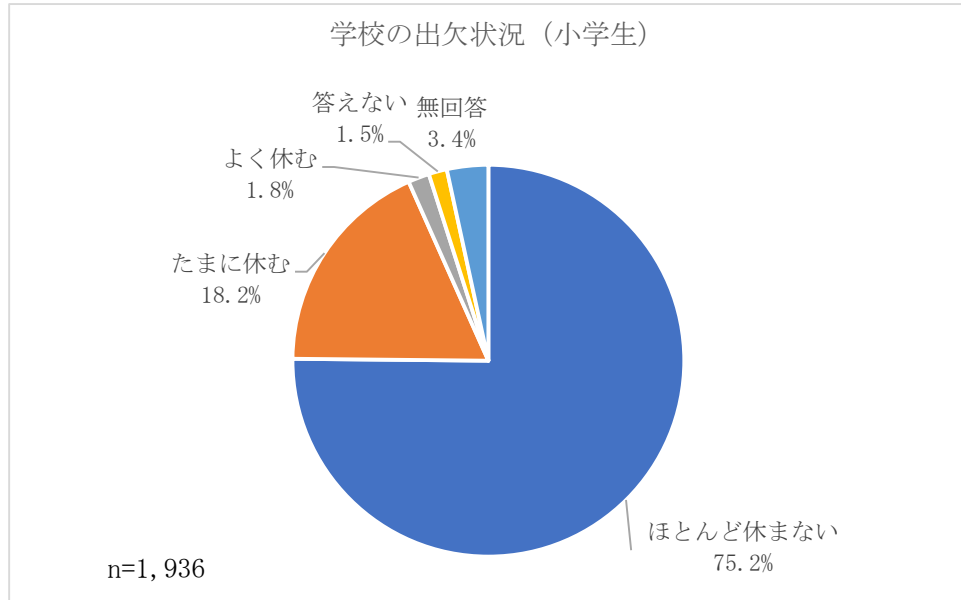
3.1.5 心身の健康状態

いずれも、「よい」が最も多くなっていますが、中学生では「あまりよくない」、「よくない」の合計が10.5%と回答者数の一割を超えています。



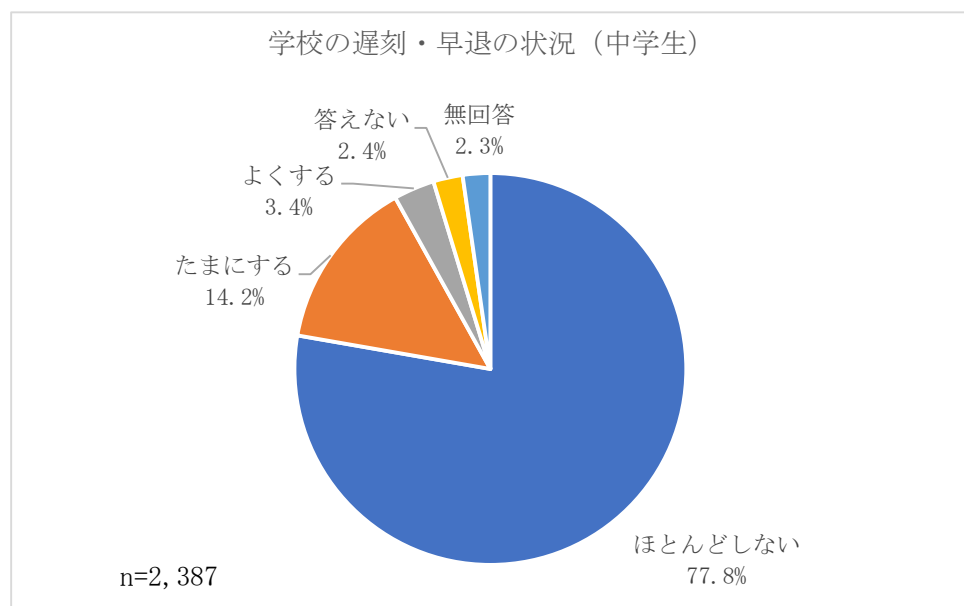
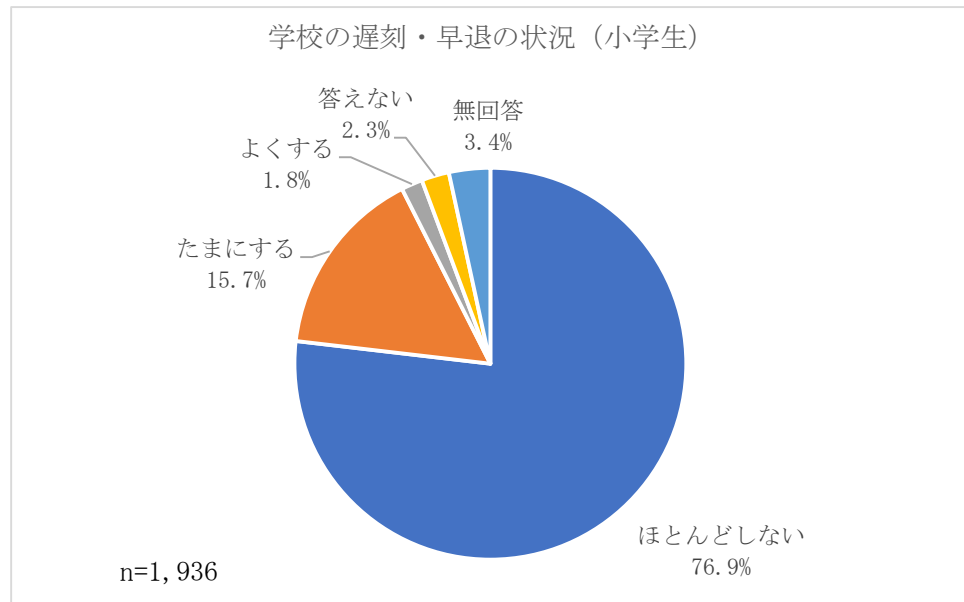
3.1.6 学校の出欠状況

いずれも、「ほとんど休まない」が最も多くなっています。小学生の方が「たまに休む」と回答している割合が高くなっています。



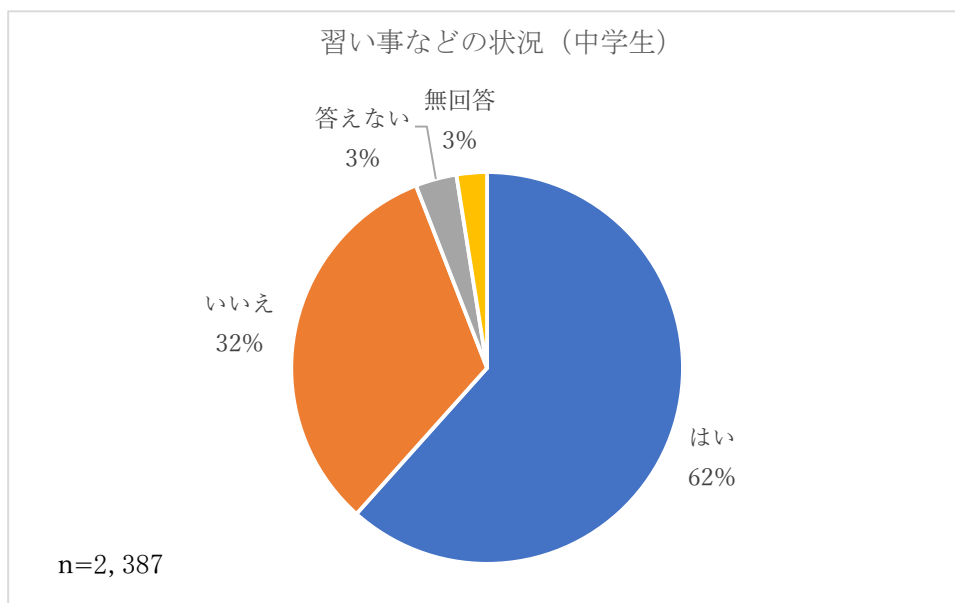
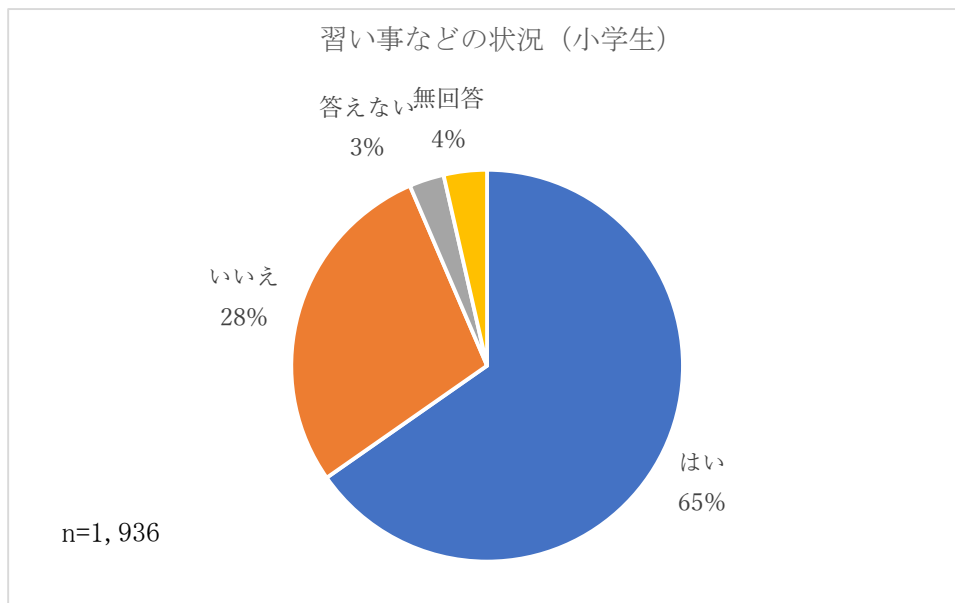
3.1.7 学校の遅刻・早退の状況

いずれも、「ほとんどしない」が最も多くなっています。「よくする」、「たまにする」の合計に大きな差はみられませんが、中学生の方が「よくする」が多くなっています。



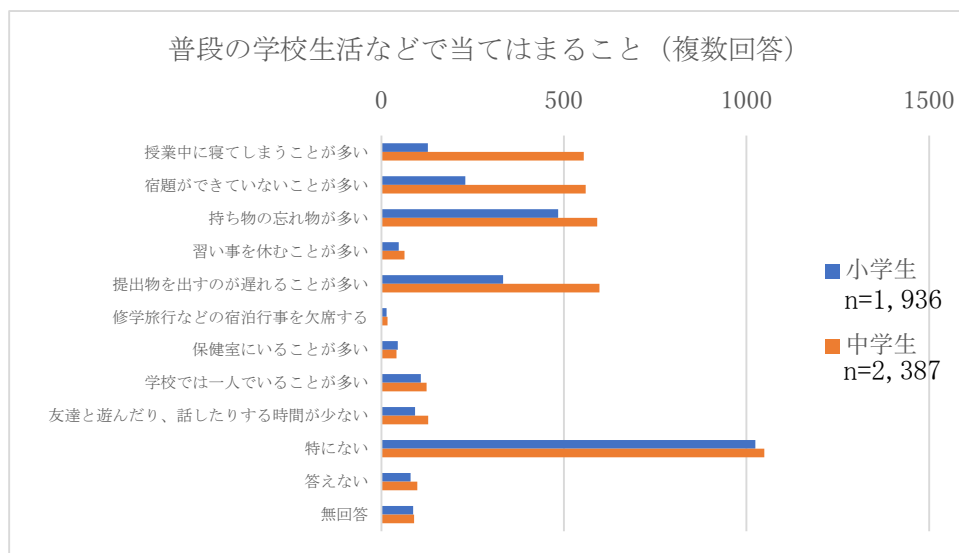
3.1.8 習い事などの状況

いずれも、「はい」が最も多く、60%強の児童が学習塾を含む何らかの習い事をしていることが分かります。



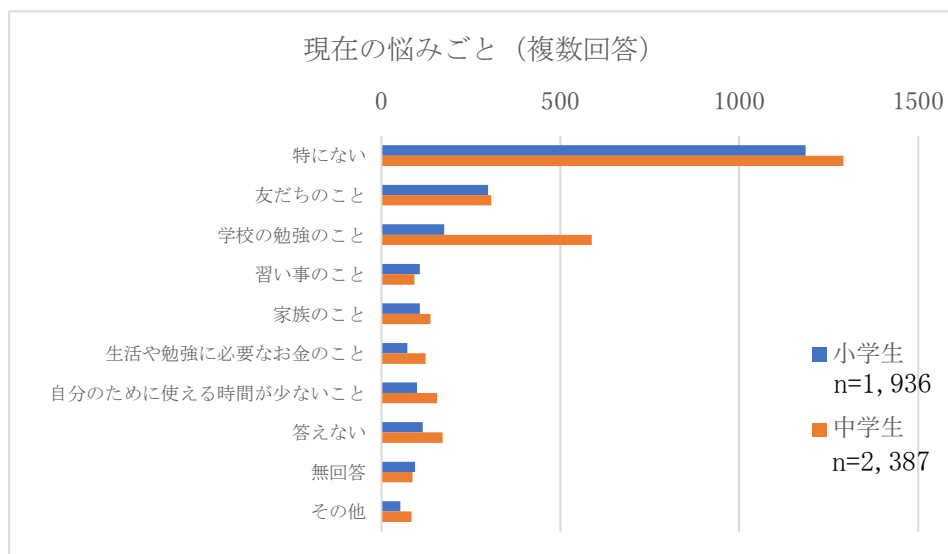
3.1.9 普段の学校生活などで当てはまること

学校生活での困りごとを尋ねており、いずれも「特にない」が最も多くなっています。一方で、中学生では「授業中に寝てしまうことが多い」、「宿題ができていないことが多い」、「持ち物の忘れ物が多い」、「提出物を出すのが遅れることが多い」がほぼ同数であり、学習に関する困りごとを抱えている児童が一定数いると推測されます。



3.1.10 現在の悩みごと（複数回答）

いずれも、「特にない」が最も多くなっています。次いで、小学生では「友だちのこと」、中学生では「学校の勉強のこと」が多くなっています。



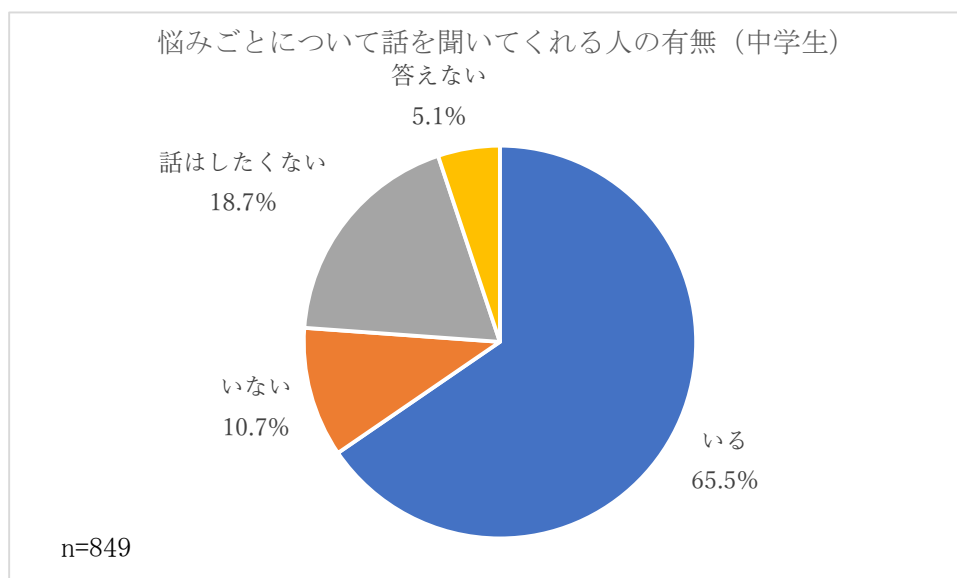
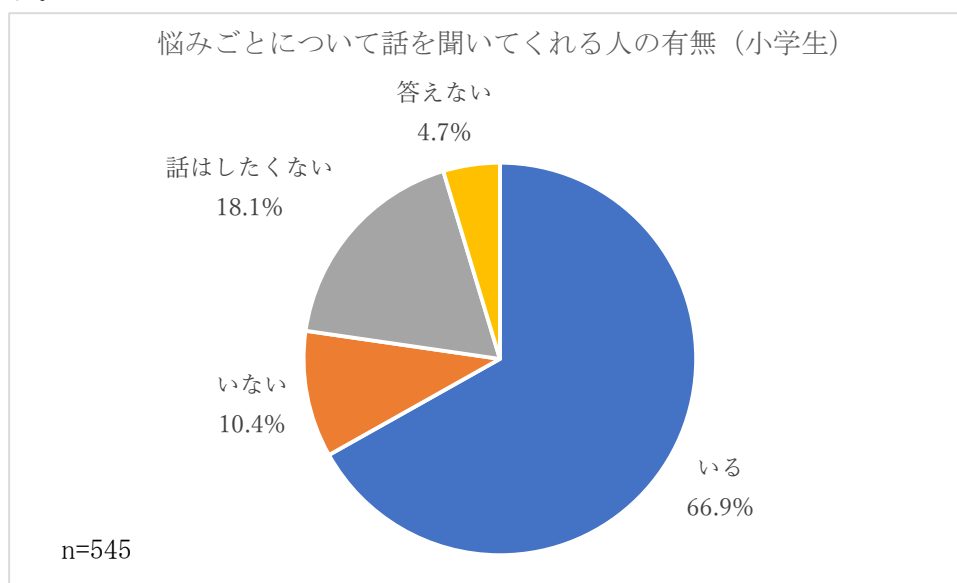
○「その他」の内容（抜粋）

「(先生・友達との) 人間関係」、「勉強・進路に関すること」、「いじめ・

嫌がらせを受けている」

3.1.11 悩みごとについて話を聞いてくれる人の有無

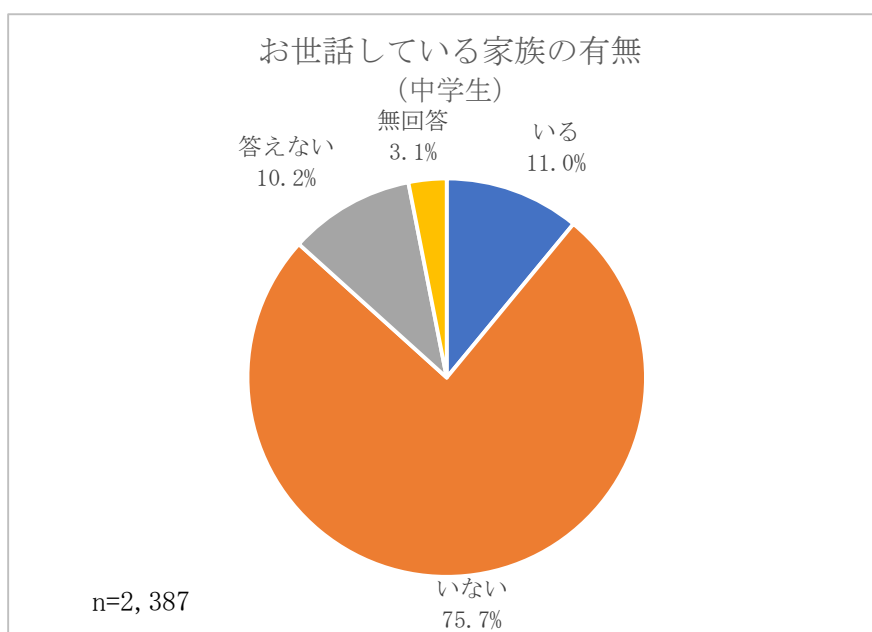
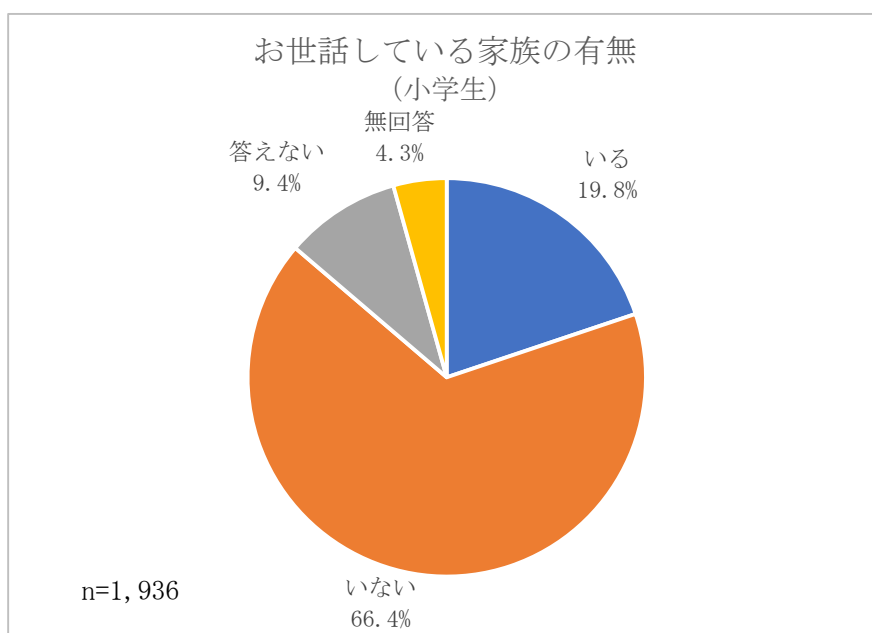
前問で、「悩みごとがある」と回答した児童の内、悩みごとについて話を聞いてくれる人は、いずれも、「いる」が最も多くなっていますが、30%弱の児童は「話を聞いてくれる人はいない」、「話したくない」と回答しています。



3.1.12 お世話している家族の有無

回答は次のとおりです。

ただし、設問に「いる」と回答した児童の内、次の設問である「お世話の対象」が「その他（ペットなど）」や「無回答」である児童（小学生 101 人、中学生 71 人）は除外し、「いない」に加算しています。

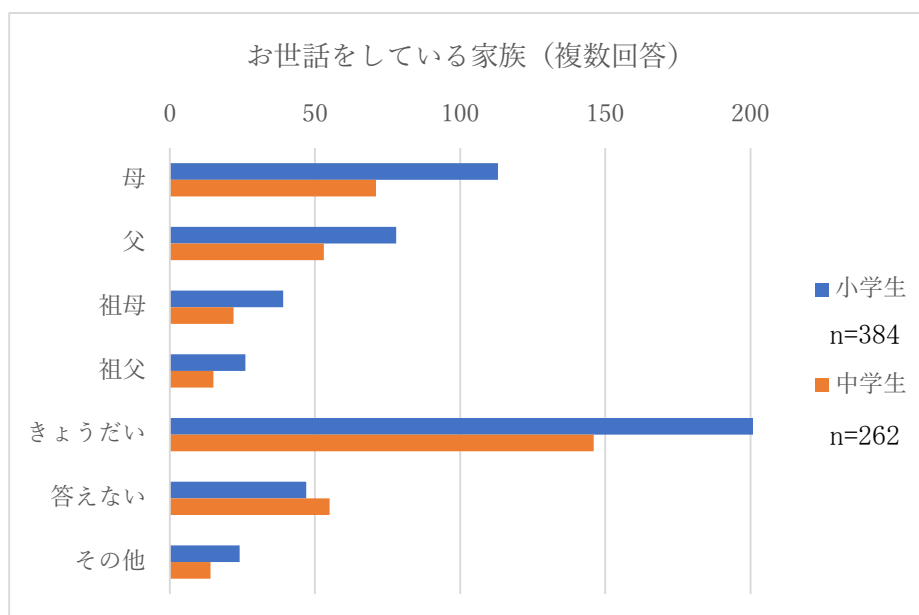


3.2 お世話している家族がいると回答した児童

以下、「お世話している家族の有無」を尋ねた設問で「いる」（「お世話の対象」が「その他（ペットなど）」や「無回答」である者を除く）と回答した児童の集計となります。

3.2.1 お世話の対象

お世話の対象は「きょうだい」が最も多く、次いで「母」、「父」の順です。また、中学生では「答えない」としている児童が小学生より多くなっています。

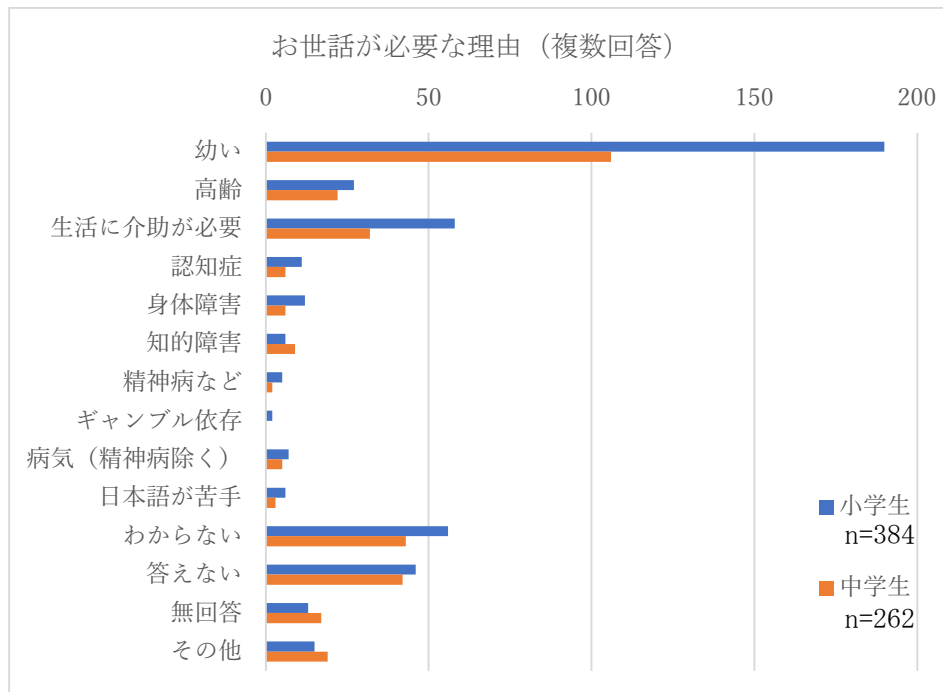


○「その他」の内容（抜粋）

「おじ・おば」、「甥・姪」、「いとこ」

3.2.2 お世話が必要な理由

いずれも「幼い」が最も多くなっています。また、「わからない」との回答も多くなっています。

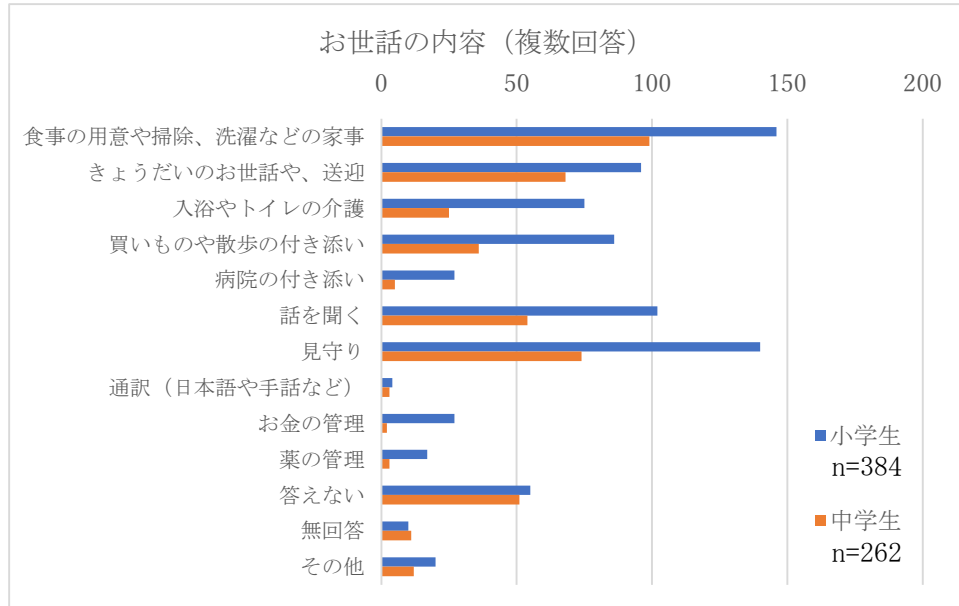


○「その他」の内容（抜粋）

「認知症ではないが物忘れがある」、「母親が大変」、「親が遅くまで仕事をしている」、「家庭内の役割」

3.2.3 お世話の内容

いずれも「家事」が最も多くなっており、次いで「見守り」が多くなっています。

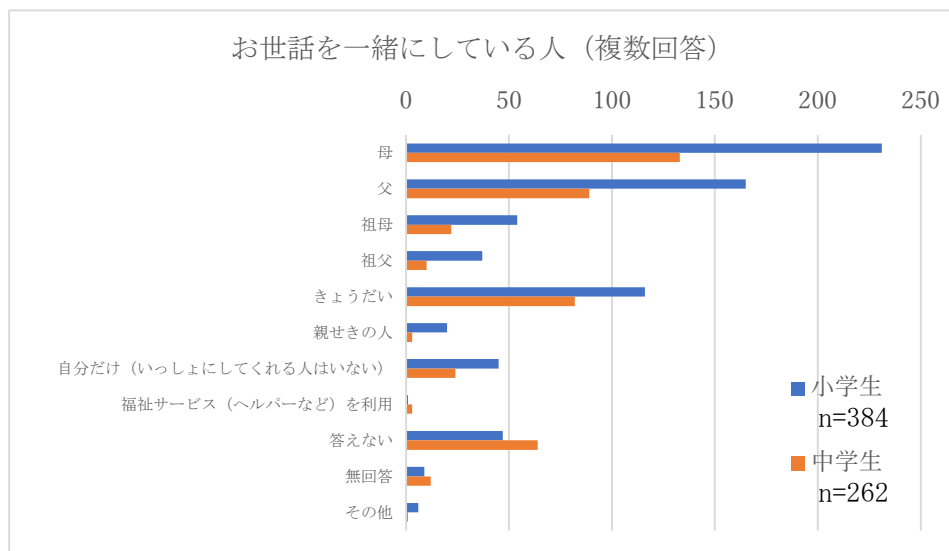


○その他の内容（抜粋）

「(小さいので) だっこ、ミルク（食事）をあげる」、「一緒に遊ぶ」、「散歩」

3.2.4 お世話を一緒にしている人

いずれも、「母」が最も多く、次いで「父」となっています。

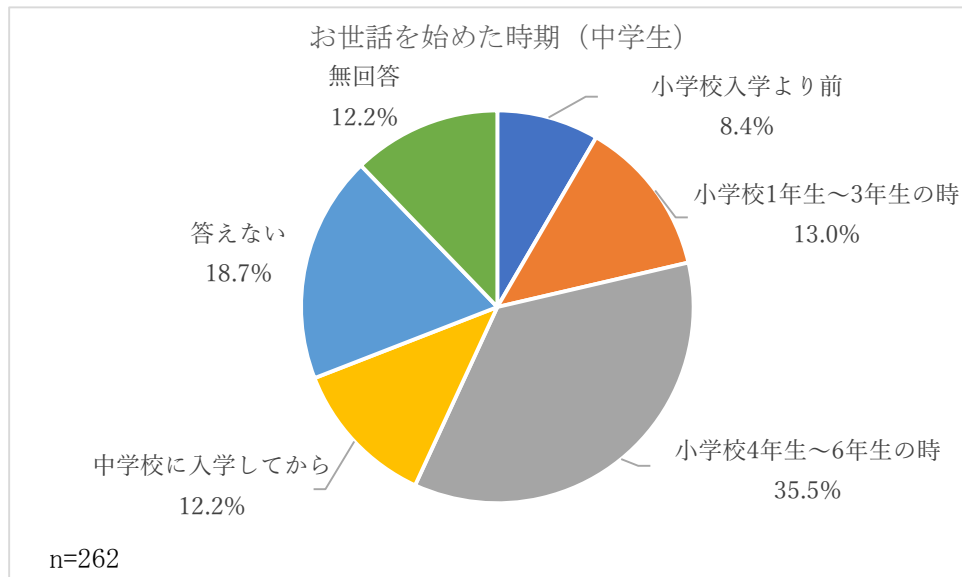
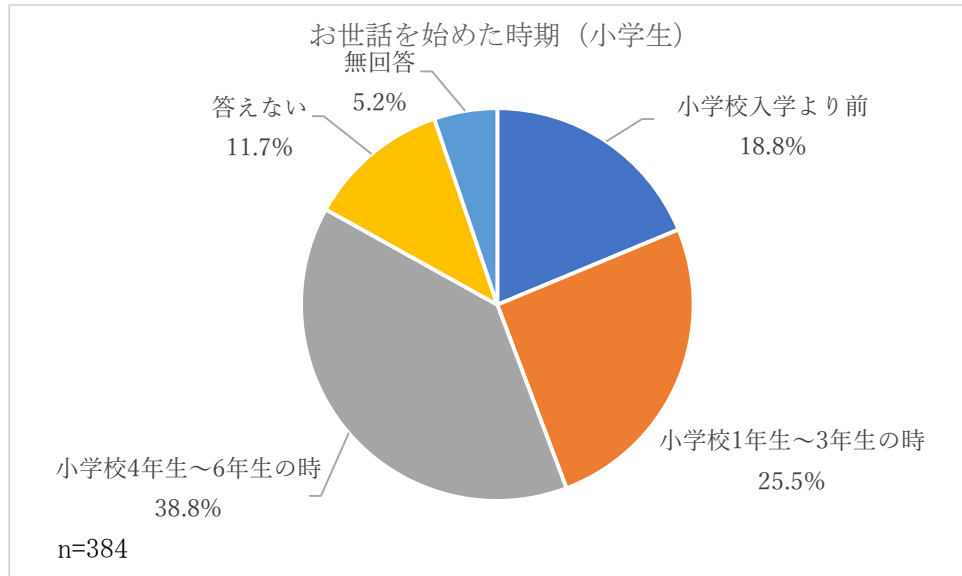


○その他の内容（抜粋）

「いとこ」、「おば」

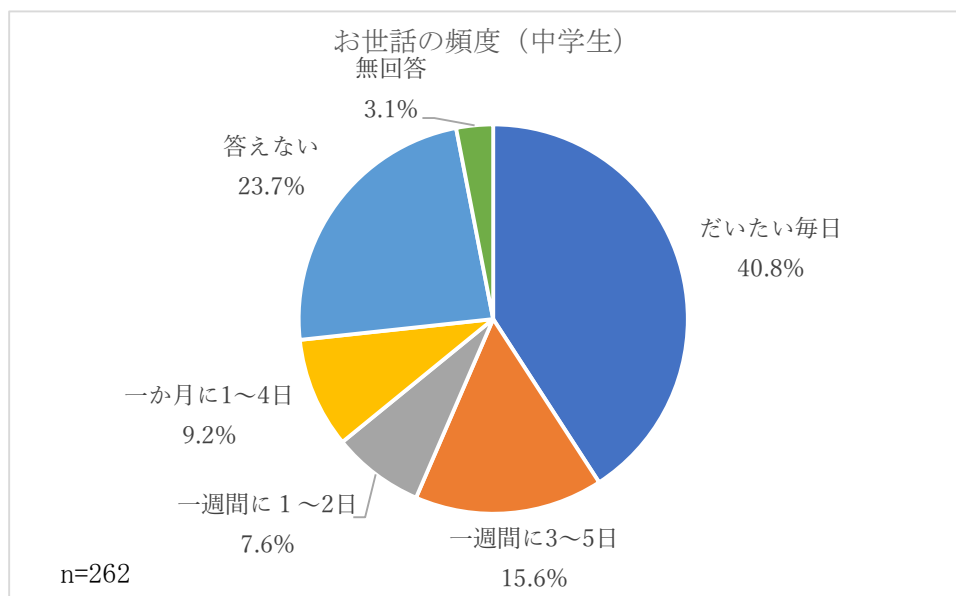
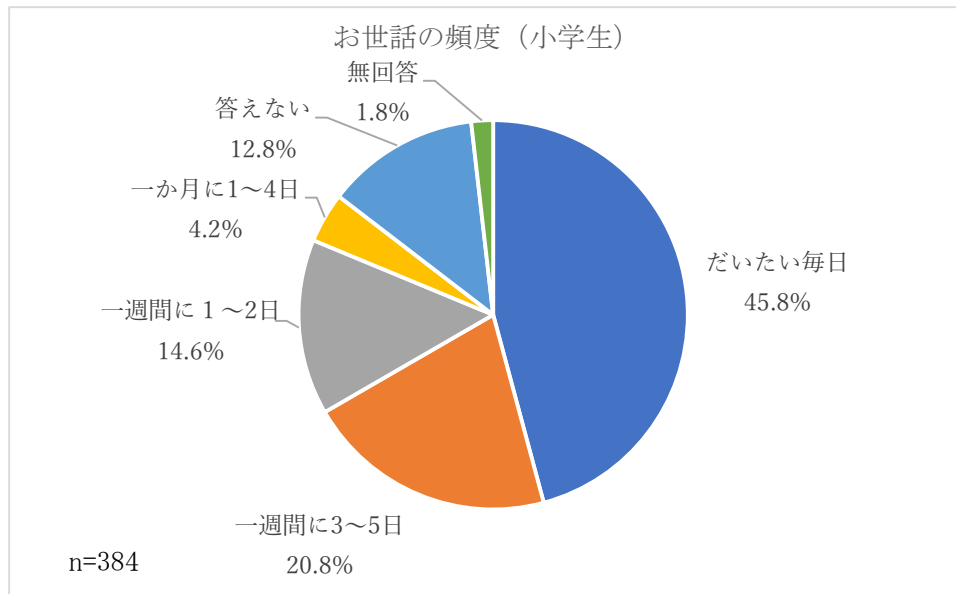
3.2.5 お世話を始めた時期

いずれも「小学校4年生～6年生の時」が最も多くなっています。



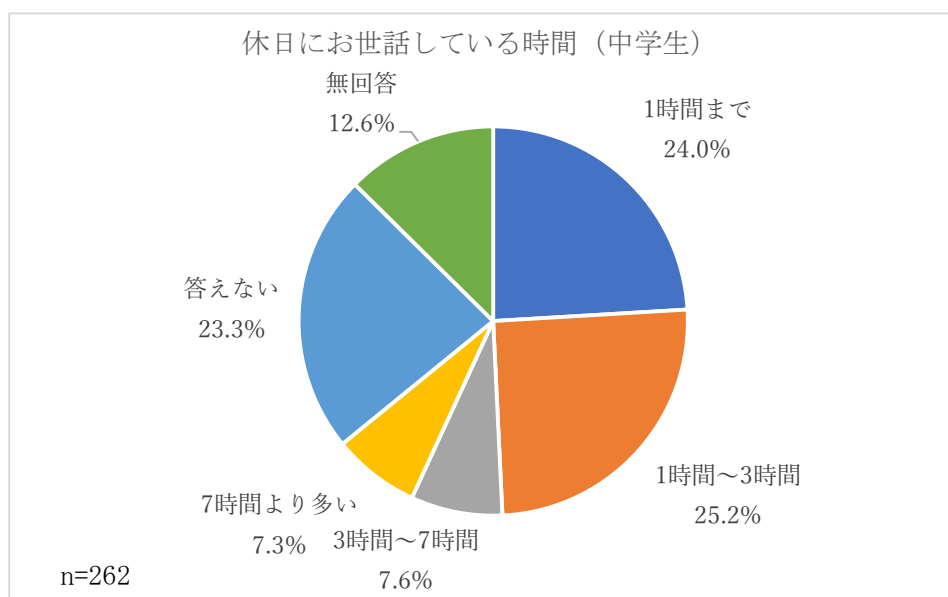
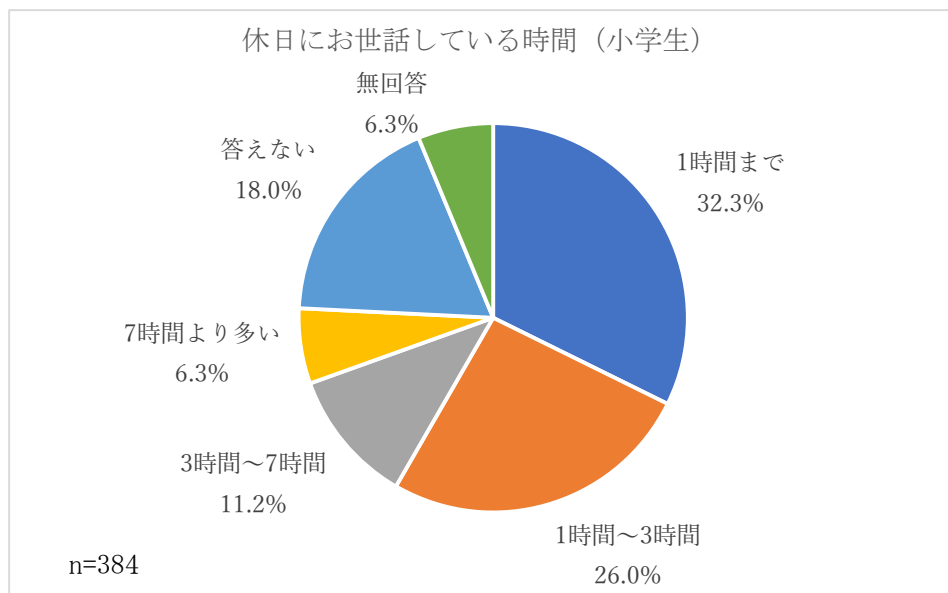
3.2.6 お世話の頻度

いずれも「だいたい毎日」が最も多く、次いで「一週間に3～5日」が多くなっています。週3日以上お世話している割合は、小学生66.6%、中学生56.4%です。



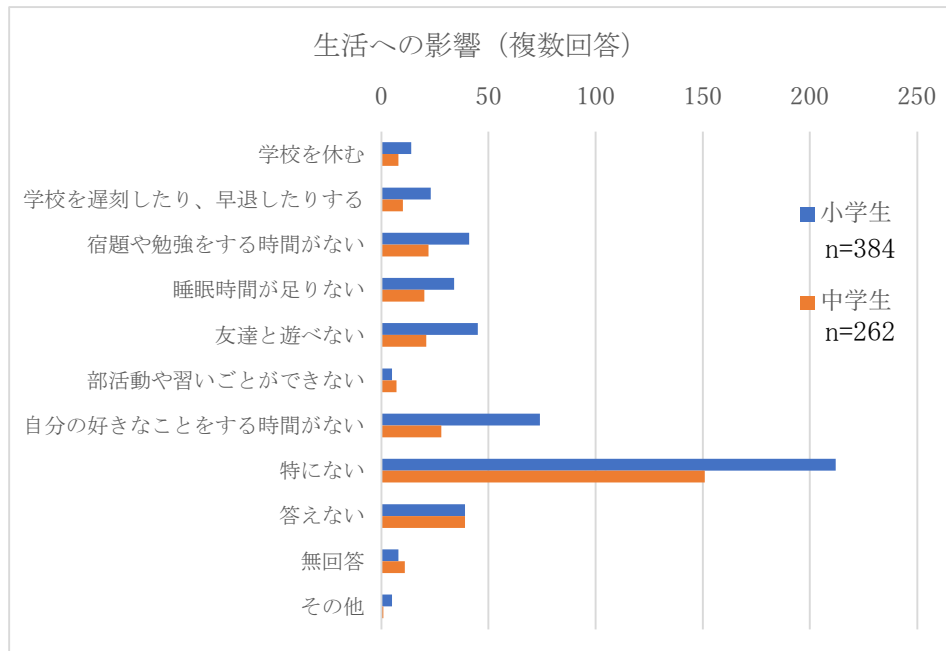
3.2.7 休日にお世話している時間

小学生では「1時間まで」、中学生では「1時間～3時間」が最も多くなっています。



3.2.8 生活への影響

いずれも「特にない」が最も多くなっています。次いで、「自分の好きなことをする時間がない」が多くなっており、他の回答からも「時間がない（足りない）」との回答が多くなっています。

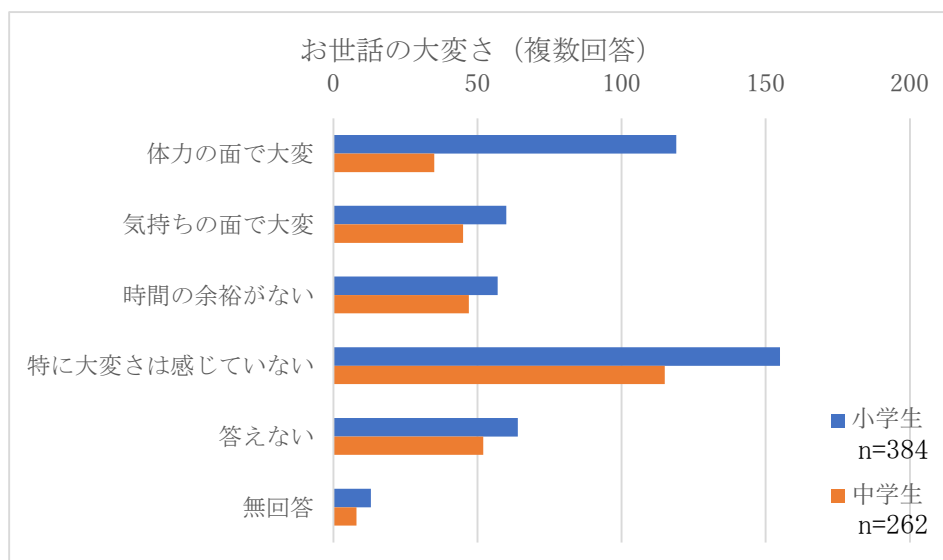


○その他の内容（抜粋）

「泣かせることもあるが、一緒に遊ぶことは楽しい」、「親が帰ってくるまでさみしい」

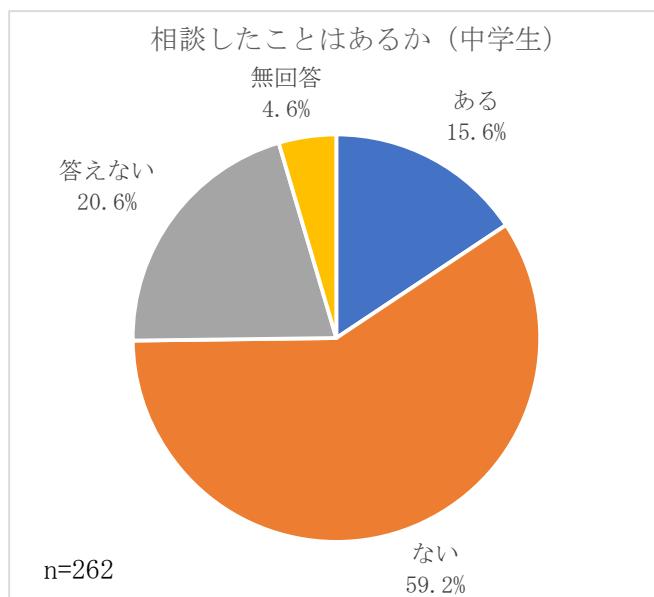
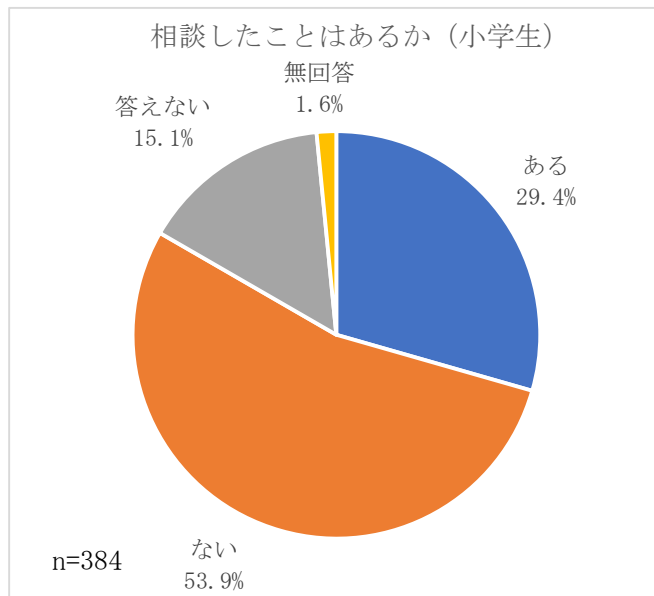
3.2.9 お世話の大変さ

いずれも「特に大変さは感じていない」が最も多くなっています。次いで、小学生では「体力の面で大変」、中学生では「時間の余裕がない」、「気持ちの面で大変」がほぼ同数になっています。



3.2.10 家族のお世話について相談したことはあるか。

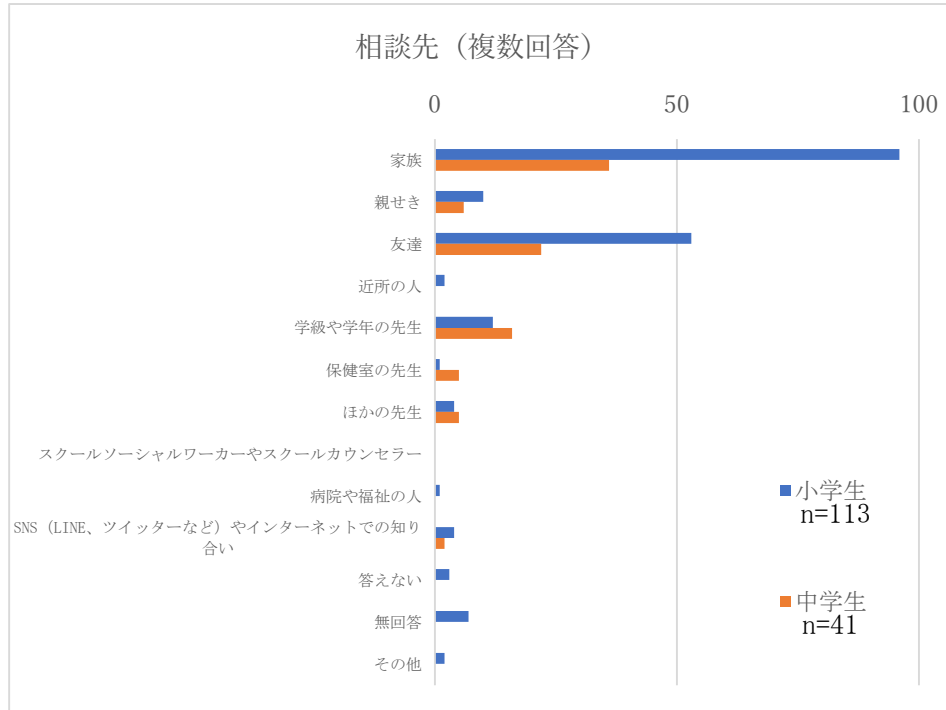
いずれも「ない」が最も多くなっています。また、中学生では小学生と比較して「ある」と答えた者の割合が低くなっています。



3.2.11 家族のお世話の相談先

家族のお世話について「相談したことがある」と回答した者の集計です。

いずれも「家族」が最も多く、次いで「友達」が多くなっています。中学生では、小学生と比較して学級や保健室などの先生に相談している人が多くなっています。



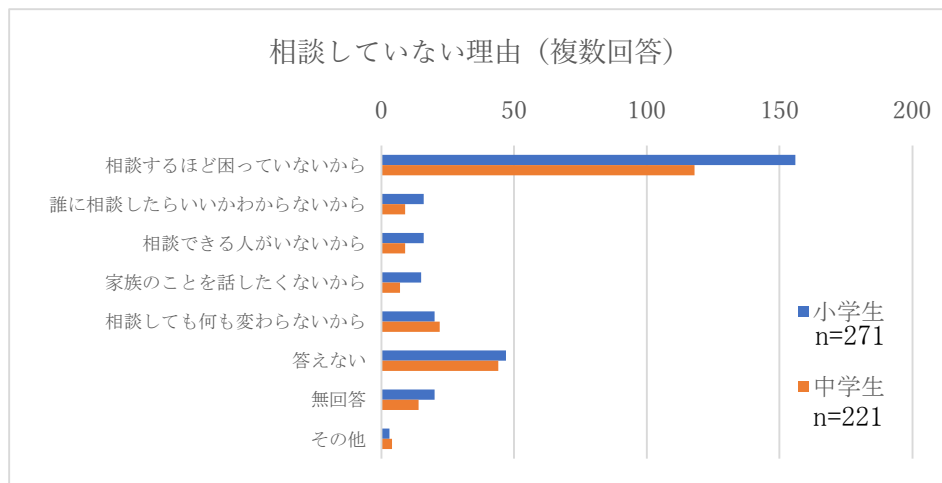
○その他の内容 (抜粋)

「親友」

3.2.12 相談をしていない理由

家族のお世話について「相談したことがある」以外の回答した者の集計です。

いずれも「相談するほど困っていない」が最も多く、次いで「答えない」が多くなっています。

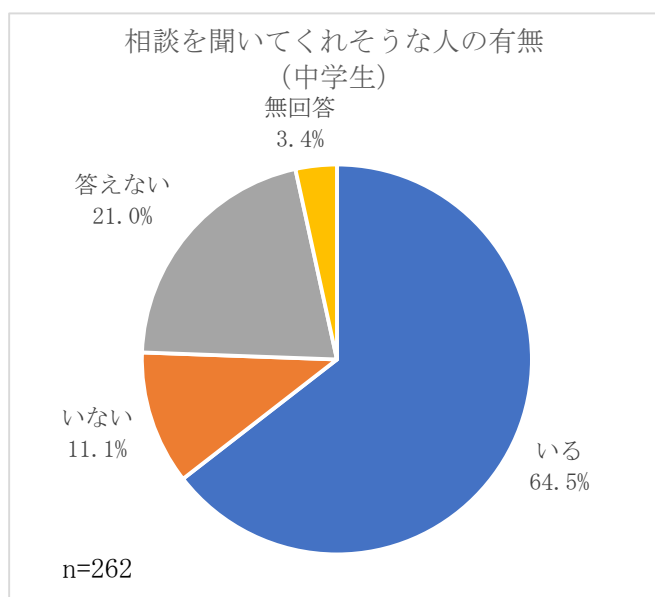
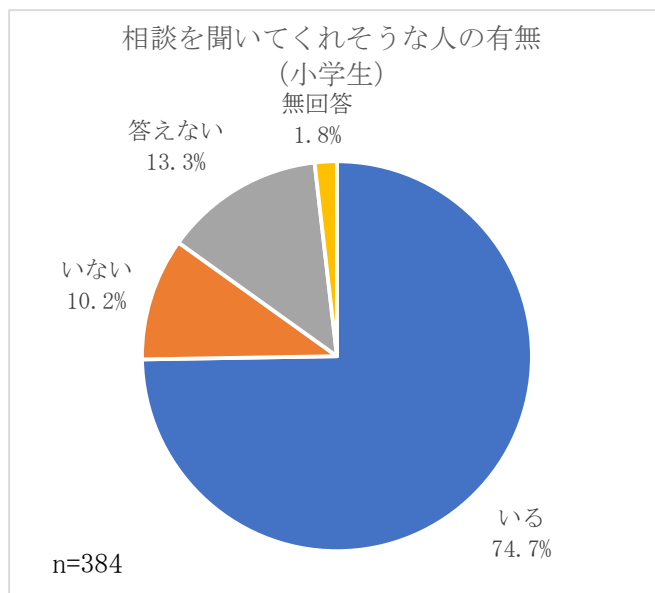


○その他の内容（抜粋）

「(相談することが) 面倒くさい」

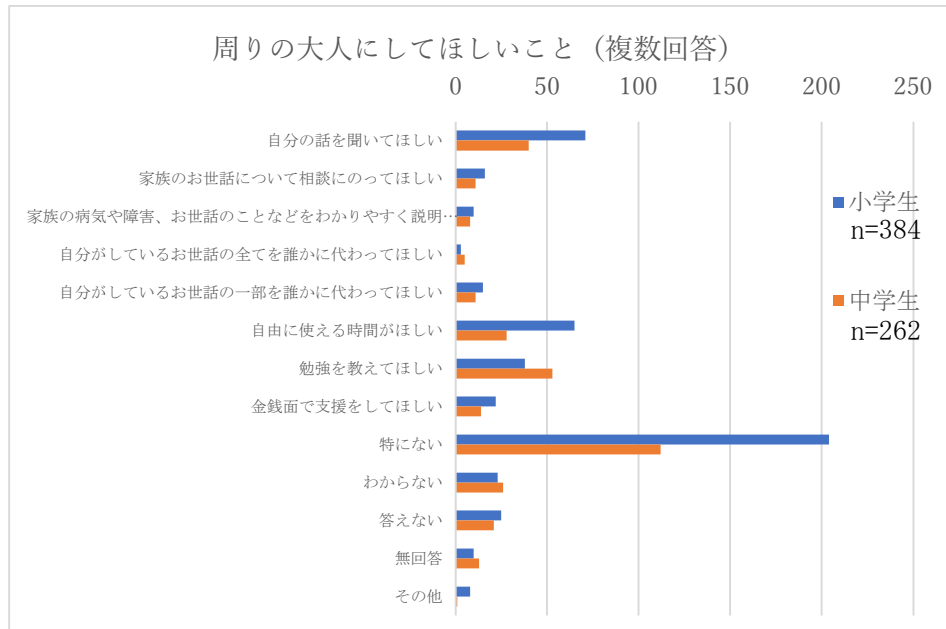
3.2.13 相談を聞いてくれそうな人の有無

いずれも、「いる」との回答が最も多いが、中学生の方が「いる」と回答した割合が低くなっています。



3.2.14 周りの大人にしてほしいこと

いずれも、「特にない」が最も多く、次いで「自分の話を聞いてほしい」が多くなっています。小学生の「自由に使える時間がほしい」、中学生の「勉強を教えてほしい」との回答も多くなっています。

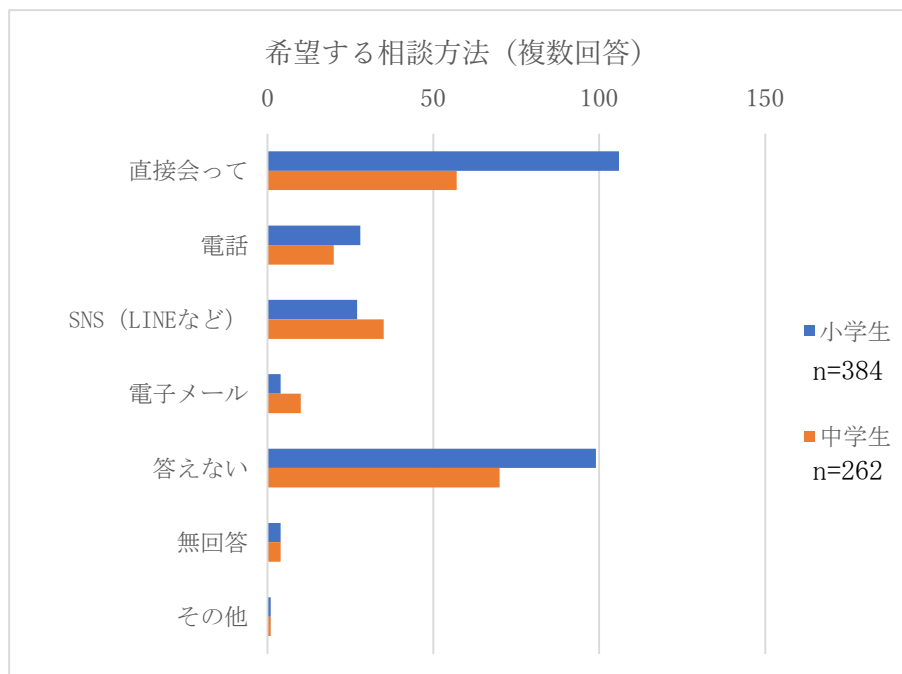


○その他の内容（抜粋）

「自分の家庭環境を誰かに分かってほしい」

3.2.15 希望する相談方法

「直接会って」との回答が多い一方、「答えない」との回答も多くなっています。

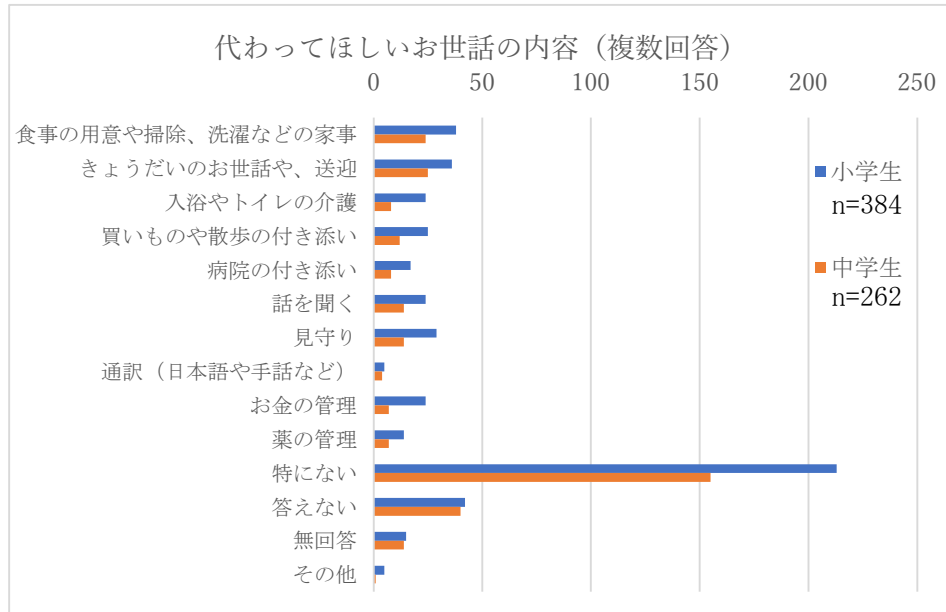


○その他の内容 (抜粋)

「話したい」「ネットの友達」

3.2.16 代わってほしいお世話の内容

いずれも、「特にない」という回答が最も多くなっています。また、「家事」、「きょうだいの世話」との回答が同程度あります。

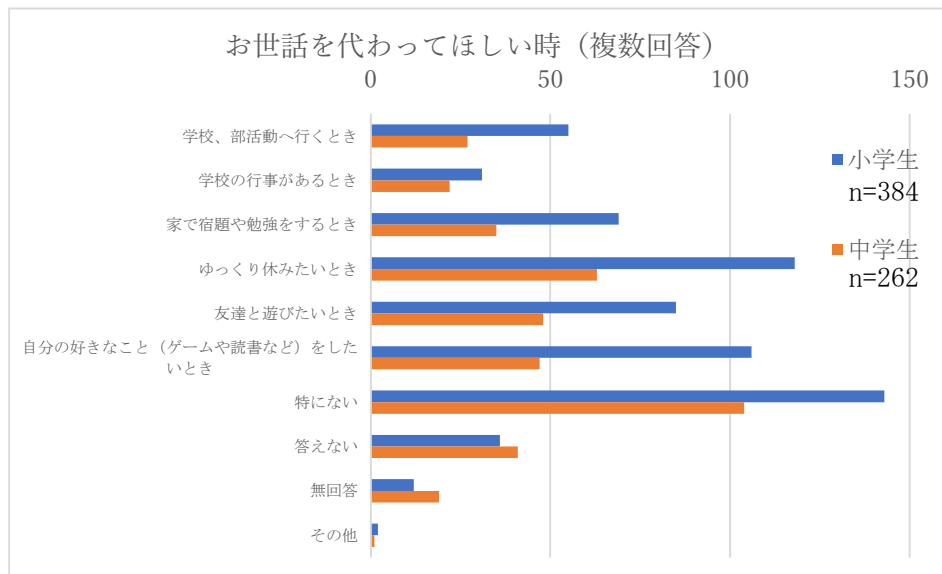


○その他の内容 (抜粋)

「家の管理」、「わからない」

3.2.17 お世話を代わってほしい時

いずれも、「特にない」が最も多く、次いで「ゆっくり休みたいとき」が多くなっています。



○その他の内容 (抜粋)

「面倒なとき」

3.2.18 家族のお世話をしている子どものために、必要だと思うことや、学校や周りの大人にしてもらいたいこと

自由記述の結果は次のとおり。可能な限り、原文を掲載している。

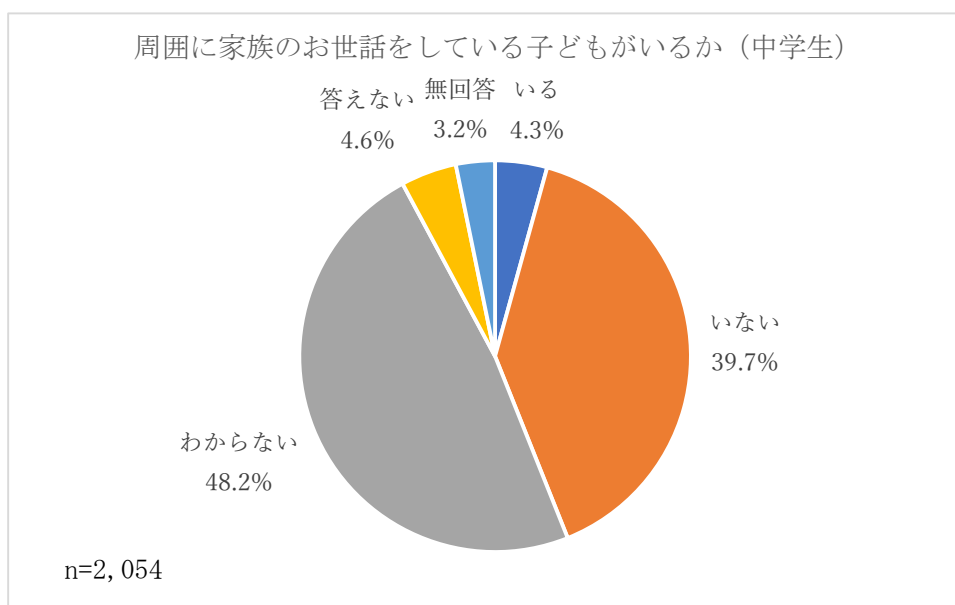
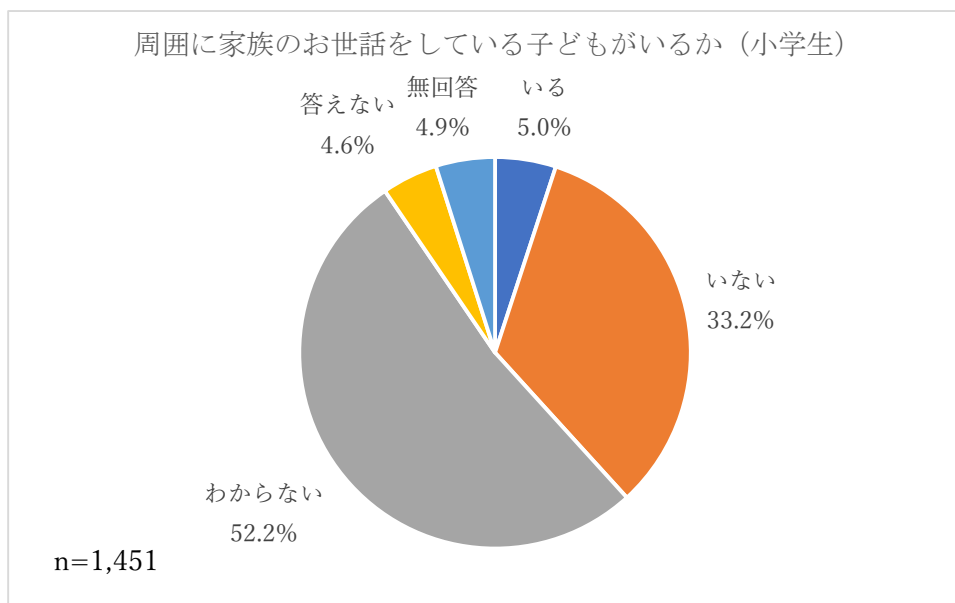
- ・ 自由な時間。
- ・ 話を聞いてほしい。
- ・ もっと見守ってほしい。
- ・ 姉をしかってほしい。
- ・ おじいちゃんやおばあちゃん弟などの家族のお世話や家事の手伝いはすごく大事で少しはしたほうがいいけどそのことばかり考えるんじゃなく自分の好きなことをするっていうのもすごく大事なことです。だから家事やお世話で忙しい人も自分の好きな事をしてリラックスしてください。
- ・ 私が世話をしていたら、相談に乗ってほしいです。後、できる範囲でもいいから手伝ってほしいです！
- ・ 私はすでに、してもらっているけど、ゆっくり気持ちを聞いてもらうこと。
- ・ 疲れていそうなら変わってあげたり「大丈夫」と声をかけてあげたりしてほしい。
- ・ 自分の時間を与えてあげてほしい。
- ・ 否定をせずに話を聞いてあげてほしい。
- ・ 決めつけないでいてあげてほしい。
- ・ 代わるっていうよりかはアドバイスしてくれたり話聞いてくれるだけでいい。
- ・ わからない

3.3 お世話している家族がないと回答した児童

以下、「お世話している家族の有無」を尋ねた設問で「いない」と回答した者の集計です。

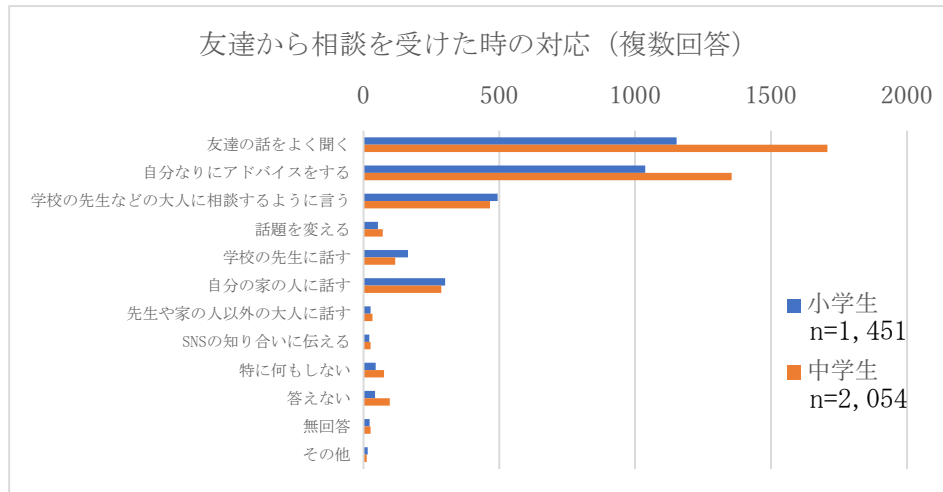
3.3.1 周囲に家族のお世話をしている子どもがいるか

いずれも、「わからない」が最も多くなっています。また、「いる」と回答した児童は小学生 5.0%、中学生 4.3%です。



3.3.2 友達から相談を受けた時の対応（複数回答）

いずれも、「友達の話をよく聞く」が最も多く、次いで「自分なりにアドバイスをする」が多くなっています。また、中学生では小学生と比べて「大人に相談するように言う」と回答した児童が少なくなっています。

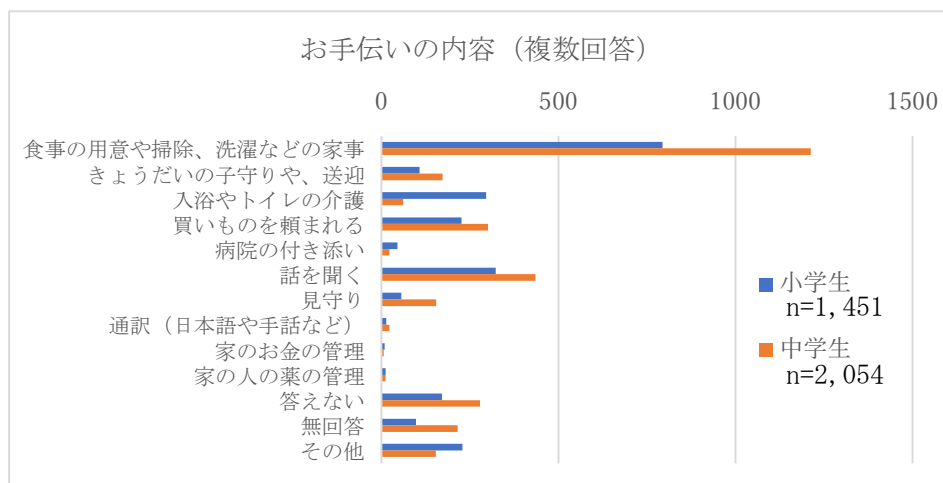


○その他の内容（抜粋）

「一緒に考える」、「励ます」、「深刻な話なら大人の人に相談する」、「楽しくなる話をする」

3.3.3 お手伝いの内容（複数回答）

いずれも、「家事」が最も多く、次いで「話を聞く」が多くなっています。

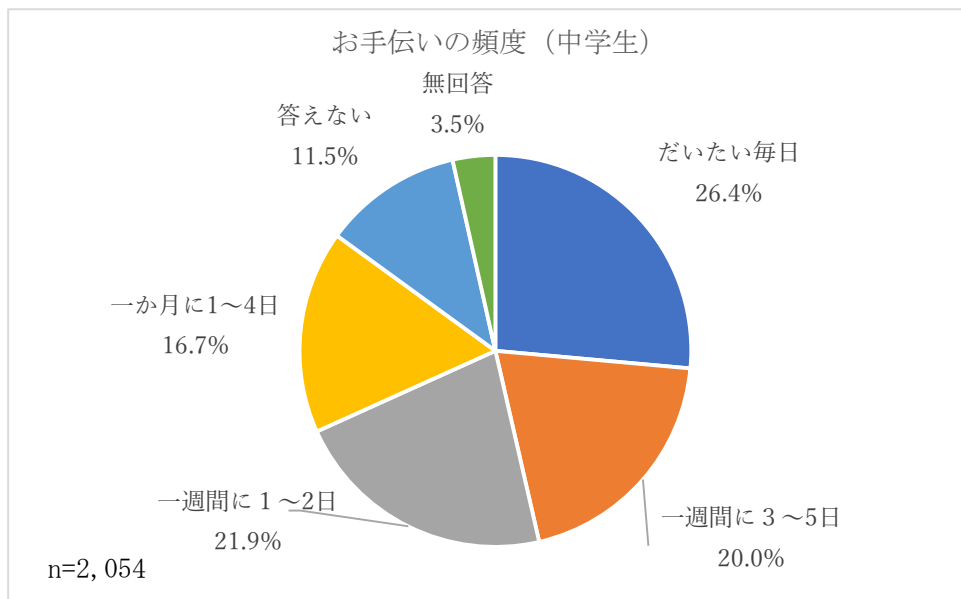
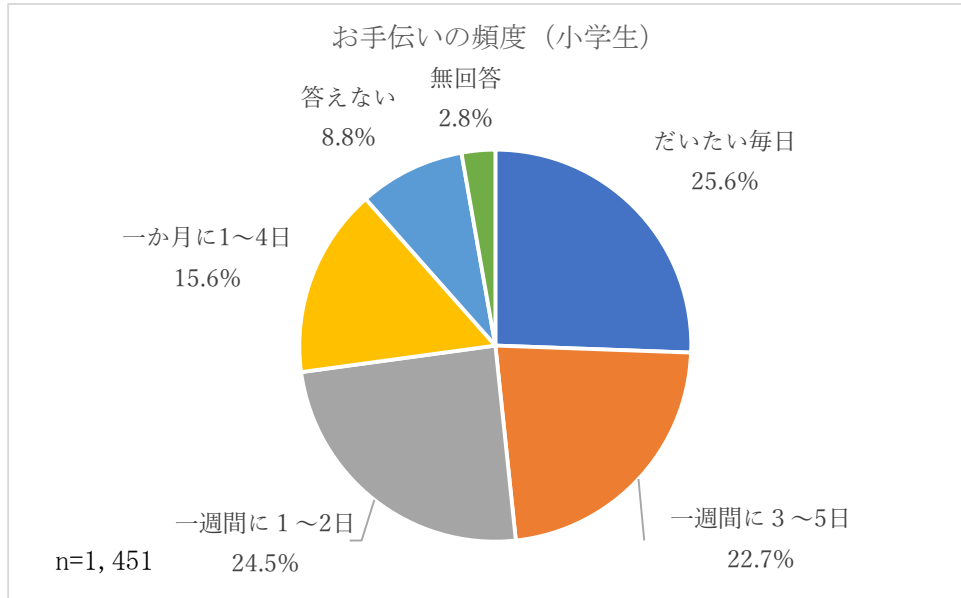


○その他の内容（抜粋）

「(お手伝いを) していない」、「ペットの世話」

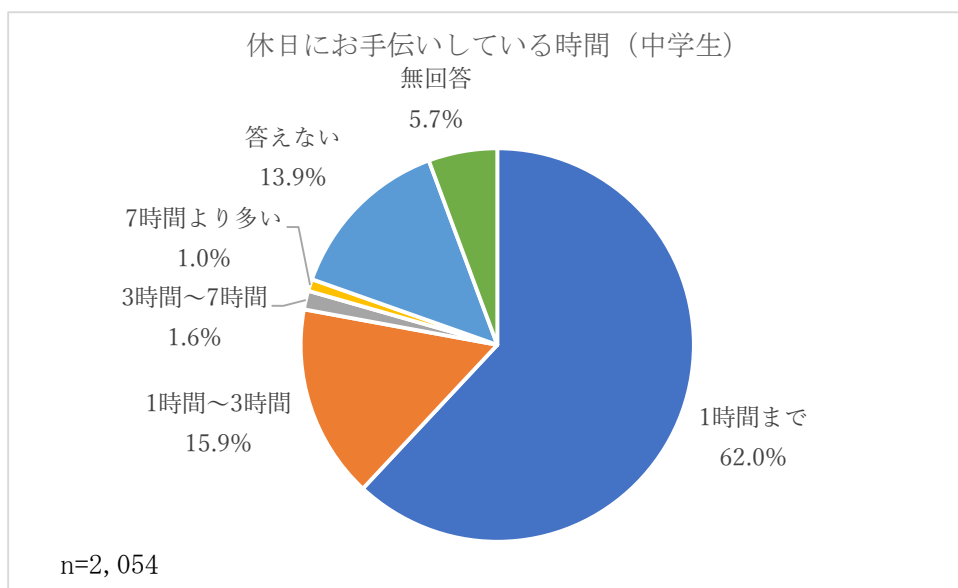
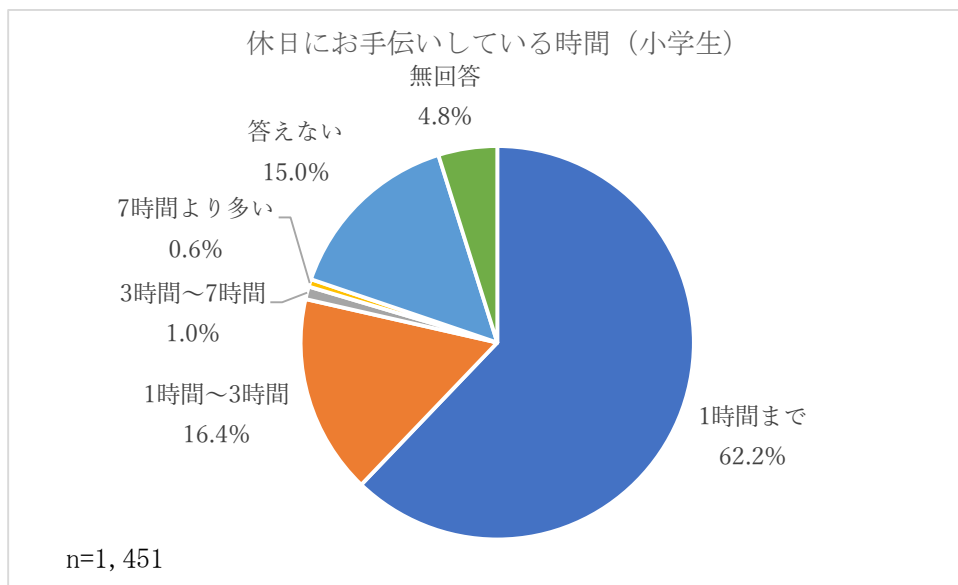
3.3.4 お手伝いの頻度

いずれも、「だいたい毎日」が最も多く、次いで「一週間に1～2日」が多くなっています。



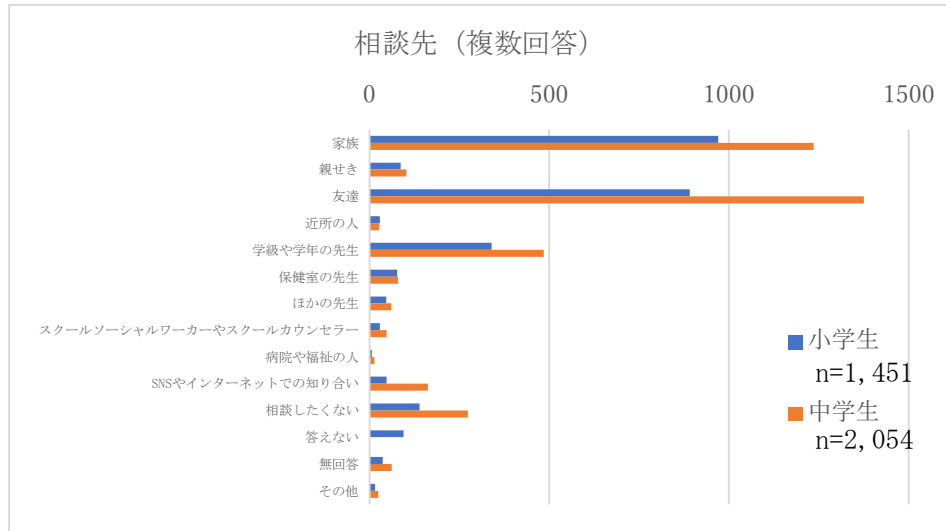
3.3.5 休日にお手伝いしている時間

いずれも、「1時間まで」が最も多く、次いで「1時間～3時間」までが多くなっています。



3.3.6 相談先（複数回答）

相談先は、小学生では「家族」、中学生では「友達」が最も多く、次いで小学生では「友達」、中学生では「家族」が多くなっています。

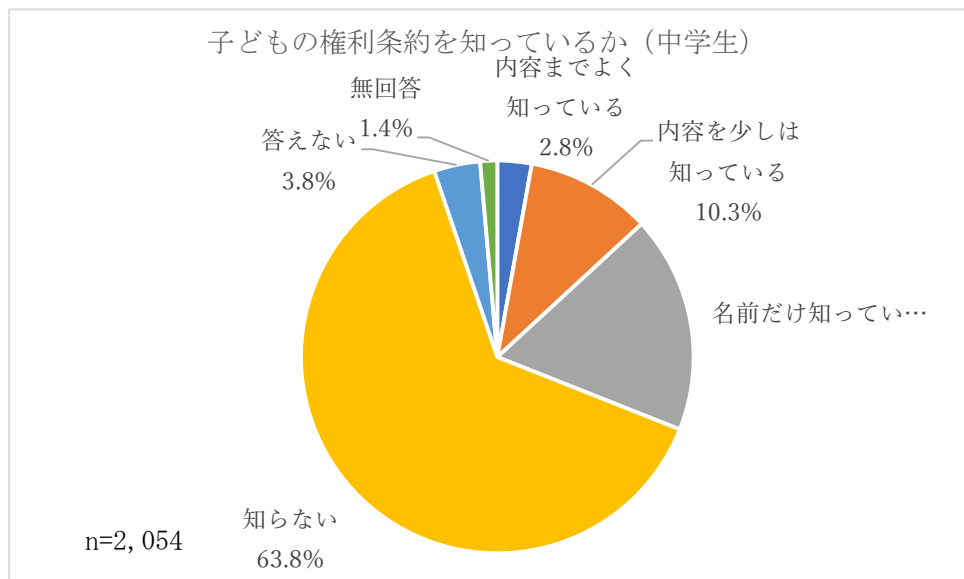
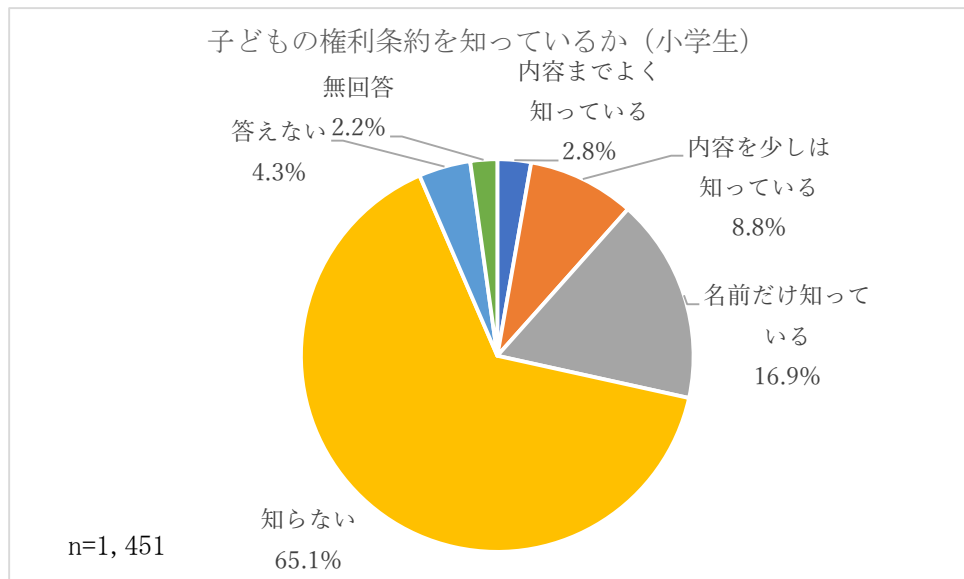


○その他の内容（抜粋）

「塾など習い事の先生」、「先輩」

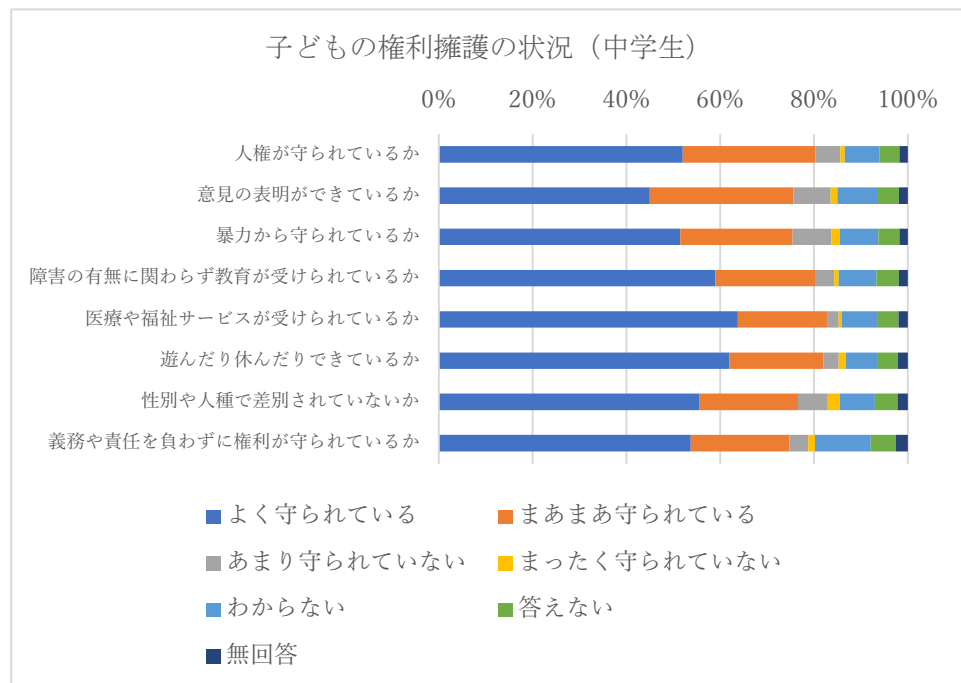
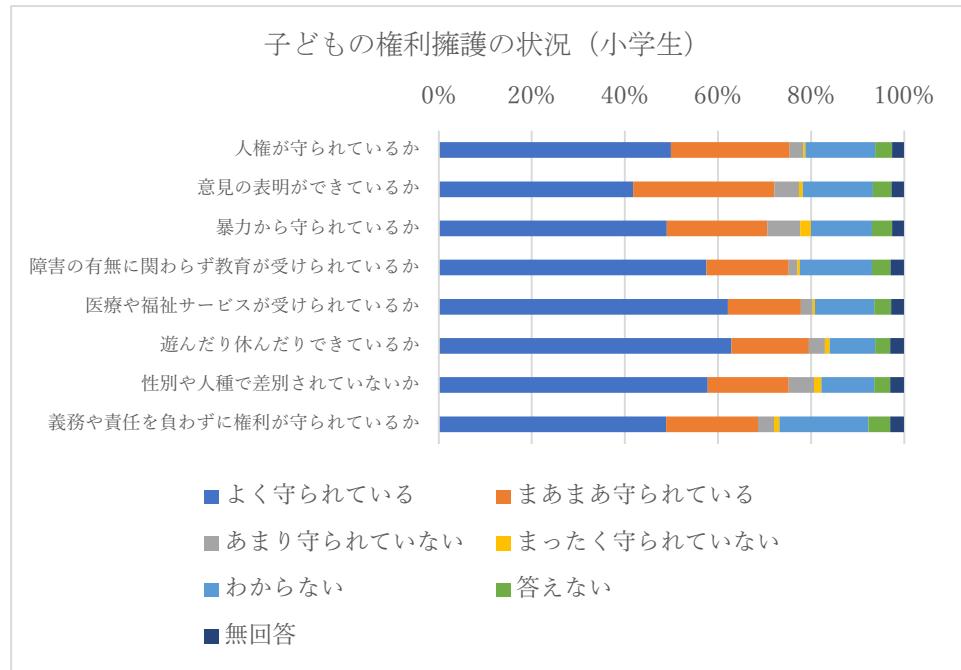
3.3.7 子どもの権利条約を知っているか

いずれも「知らない」が最も多く、次いで「名前だけ知っている」が多い。



3.3.8 子どもの権利擁護の状況

いずれも、「暴力から守られているか」、「意見の表明ができていないか」、「義務や責任を負わずに権利が守られているか」について、「よく守られている」、「まあまあ守られている」との回答が少ない。



3.3.9 生活の中で、子どものために、必要だと思うことや、学校や周りの大人にしてもらいたいこと

自由記述の結果は次のとおり。可能な限り、原文を掲載している。

- ・ しっかりと子どもの話をきいて欲しい。
- ・ 親が子供の話をしっかりと聞く。
- ・ 子供の言うことも、しっかりと聞いて、だめなら、しっかりと理由を言ってほしい。
- ・ 教え方が、下手な教師を、教育して欲しい。
- ・ ヤングケアラーを増やさないため、介護が出来る人を増やしてほしい。
- ・ コロナでも今までのふつうの学校生活を送りたいです。
- ・ いじめがあっても、それを隠蔽することなく、いじめられている子とちゃんと向き合って、その子のケアや、いじめている人を叱る必要があると思う。もしその子の身に何かあったとしても、保護者の方々にしっかりと説明をして、問題解決に取り組んでいけば、この世の中で起きているいじめはなくなっていくと思う。学校や教育委員会が自らの利欲のためにいじめを隠蔽していて、それによって大切な一人の命が失われて行っているのだから、学校側が自分の利欲と一人の命どちらが大切かを考え、そのようなことが二度と起きないようにしてほしい。
- ・ いじめは言葉だけでは解決できないので見回りの回数を増やしたりして解決してほしい。それにいじめをしているほうにも家庭内での問題もあると思うのでそういったことも解決してほしい。
- ・ 子供は誰にでも悩みを聞いてもらうことができること。
- ・ お姉ちゃんが障害者で、そういう人を怖がる人もいるから怖くないと思って欲しいです。
- ・ 自分の意見が言えない子もいるので、気にかけてあげたらいいと思います。
- ・ 意見を否定せず、寄り添ってほしい。
- ・ 相手と比べないでほしい。
- ・ ポロっといわれた言葉に傷つく人もいるから気を付けてほしい。
- ・ 話を聞くときは笑わず聞いてほしい（話をそらさないでほしい）。
- ・ がんばれってあんまり言わないでほしい（個人の意見なので全員そうとは限らない）。
- ・ ジェンダーやLGBTQ+のことをもっと知ってほしい。
- ・ 「子供だから」と止めるくせに「もう中学生でしょ」というのはやめてほしい。都合がいい時だけ中学生扱いしないでほしい。
- ・ 相談などをしたときいつも思うけど、アドバイスはすぐに要らない。私

としては共感して欲しい。いつもそうやって「こうしたほうが,,,」とか、「そんなことしなくても,,,」とか言われると、自分が悪いみたいでいやだ。だから私の行動に否定したりしないでほしいです。

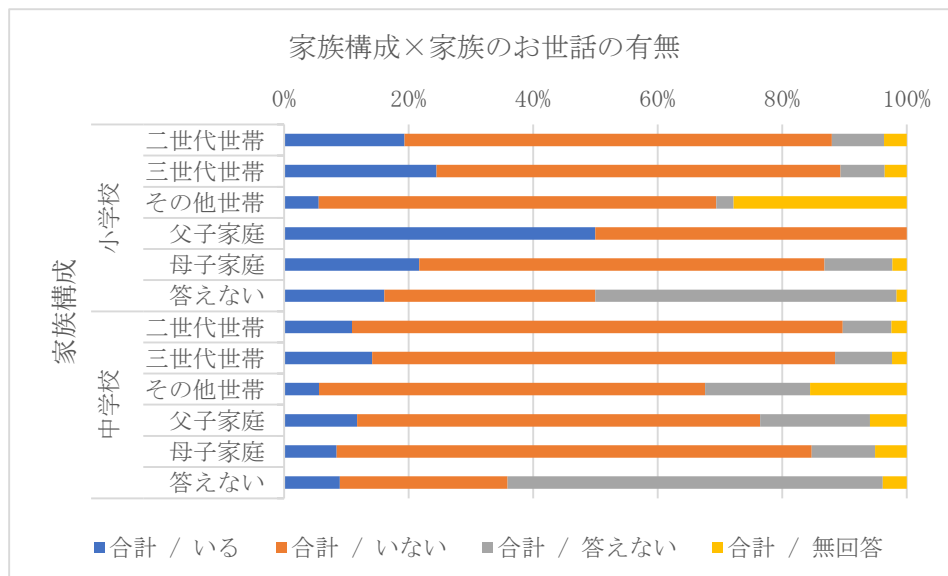
- 何でも特性があると判断しないでほしい。
- 何かおかしいからと言って、すぐに特性があると判断しないでほしい。

4 調査の結果（追加分析）

4.1 家族構成とお世話の状況

4.1.1 家族構成×家族のお世話の有無

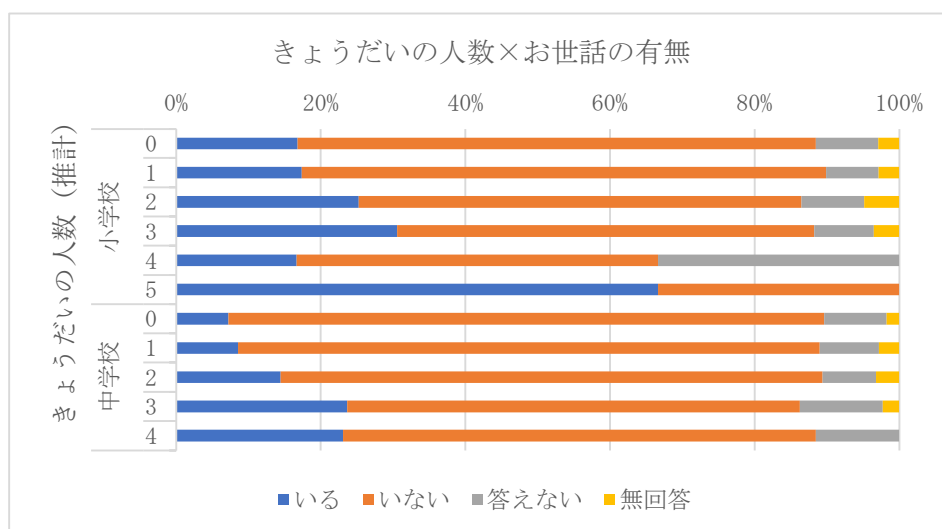
小学生の父子家庭で「お世話している家族がいる」との回答が多くなっています（標本数は12）。またいずれも、二世帯世帯より三世帯世帯の方がやや「お世話している家族がいる」との回答割合が高くなっていますが、他の世帯と大きな差はありません。



4.1.2 きょうだいの人数×家族のお世話の有無

きょうだいの人数を直接問う設問はありませんが、家族の人数と家族構成からきょうだいの人数を推計しました。

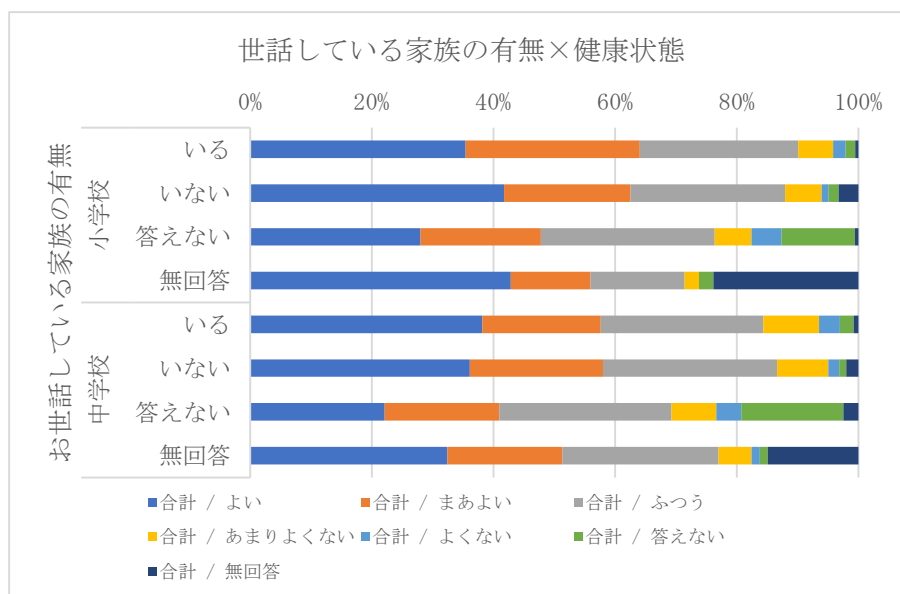
その結果、いずれも、きょうだいの人数が増えるとお世話している家族が「いる」との回答割合が高くなる傾向にあります。



4.2 家族の世話の有無と生活状況

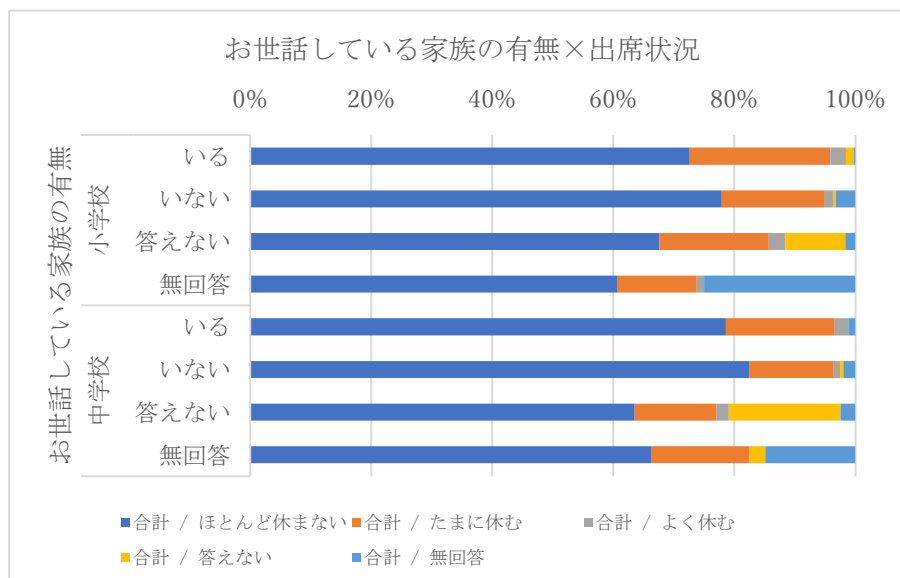
4.2.1 家族の世話の有無×健康状態

いずれにおいても、世話の有無と健康状態において大きな差は見受けられません。



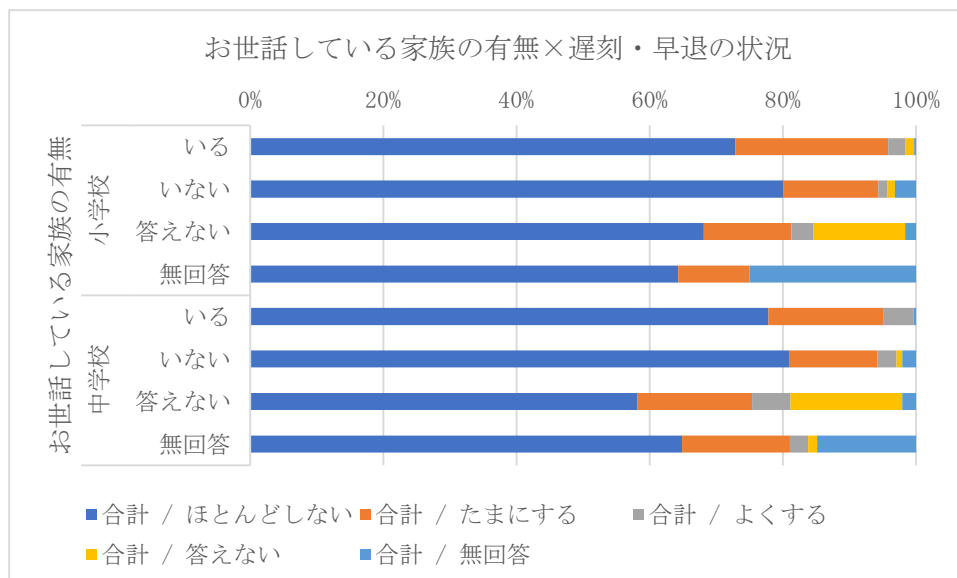
4.2.2 家族の世話の有無×出席状況

いずれも、お世話している家族がいる場合、いない場合に比べて「たまに休む」、「よく休む」の割合が高くなっています。



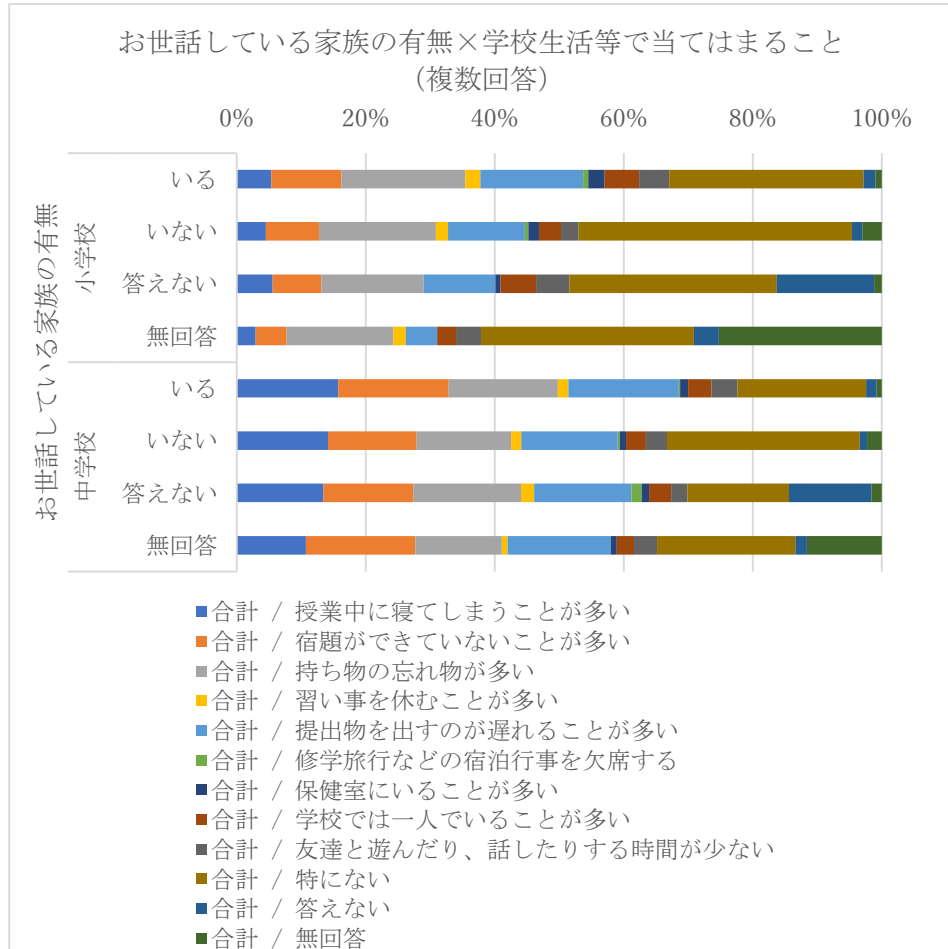
4.2.3 家族の世話の有無×遅刻や早退の状況

いずれも、お世話している家族がいる場合、いない場合に比べて「たまにする」、「よくする」の割合が高くなっています。



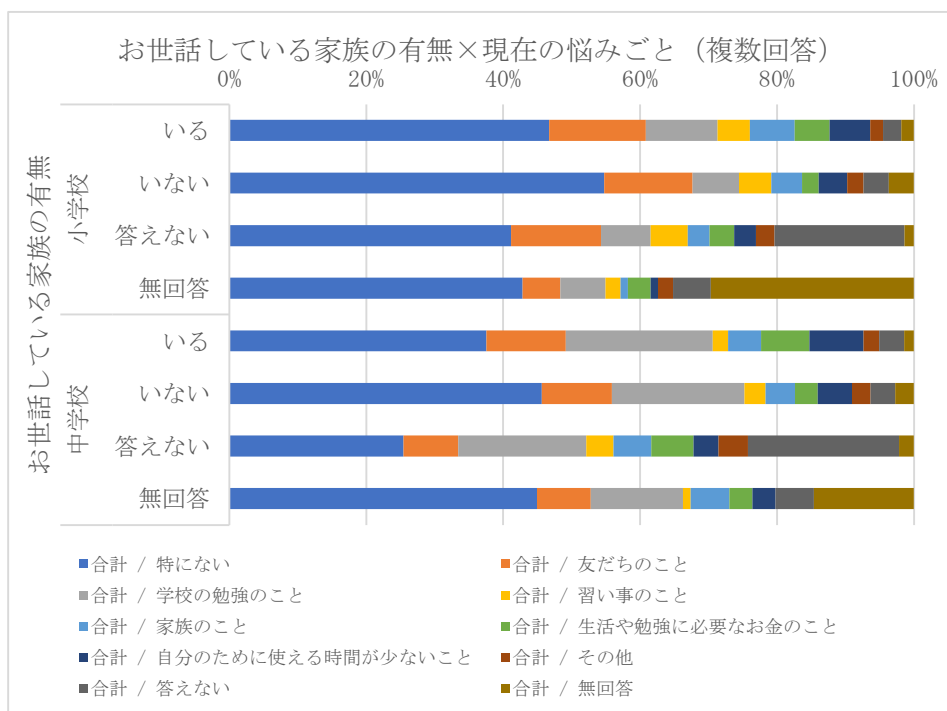
4.2.4 家族の世話の有無×学校生活等で当てはまること

いずれも、世話をしている家族がいる場合、いない場合と比較して「特にない」との回答が少なくなっています。特に「提出物を出すのが遅れることが多い」割合が高くなっています。



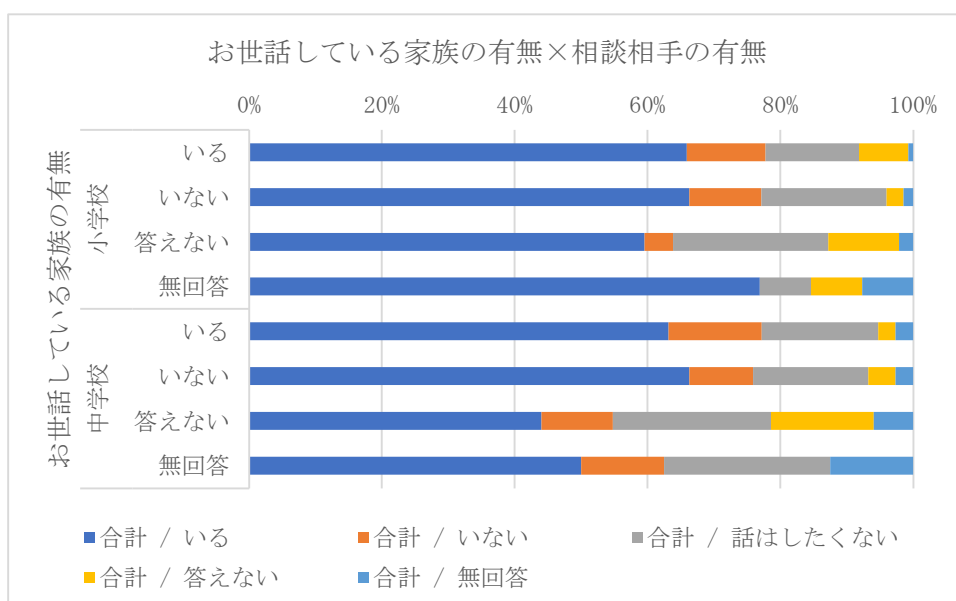
4.2.5 家族の世話の有無×現在の悩みや困りごと

いずれも、世話をしている家族がいる場合、いない場合と比較して「特
ない」との回答が少なくなっています。特に、「生活や勉強に必要なお金の
こと」、「自分のために使える時間が少ないこと」の割合が高くなっています。



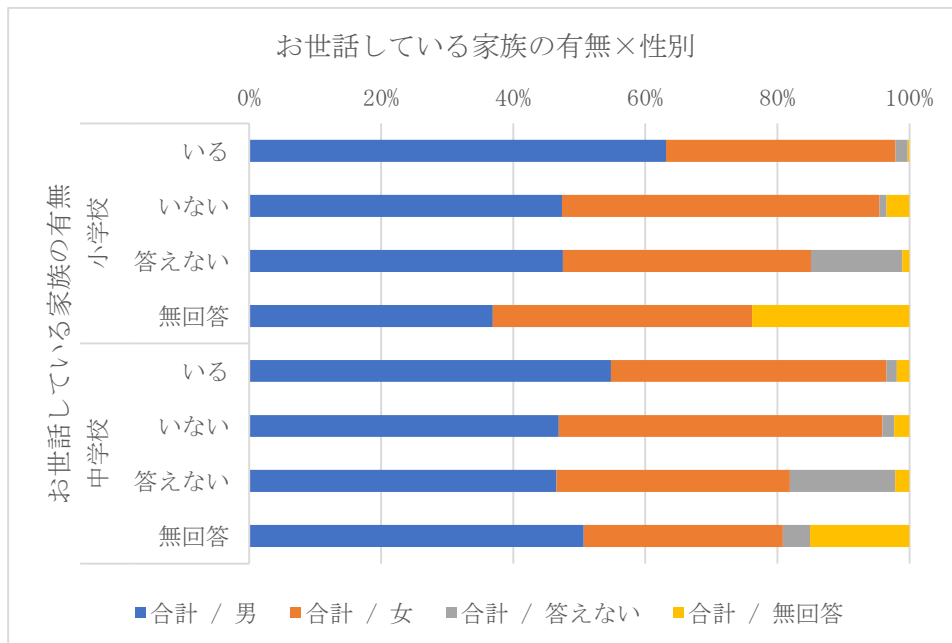
4.2.6 家族の世話の有無×相談を聞いてくれる人の有無

小学生ではお世話している家族がいる場合「答えない」の割合が高くなっ
ています。また、中学生では「いない」の割合が高くなっています。



4.2.7 家族の世話の有無×性別

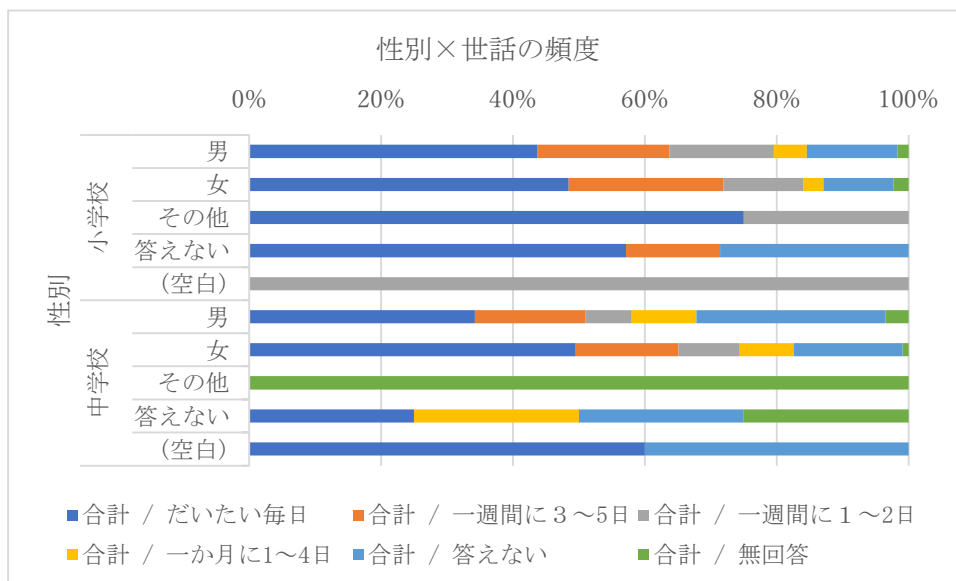
小学生では全体の回答中「男性」の割合が6ポイント高いことを加味しても、いずれも、「男性」の割合が高くなっています。



4.3 性別による世話の状況の違い

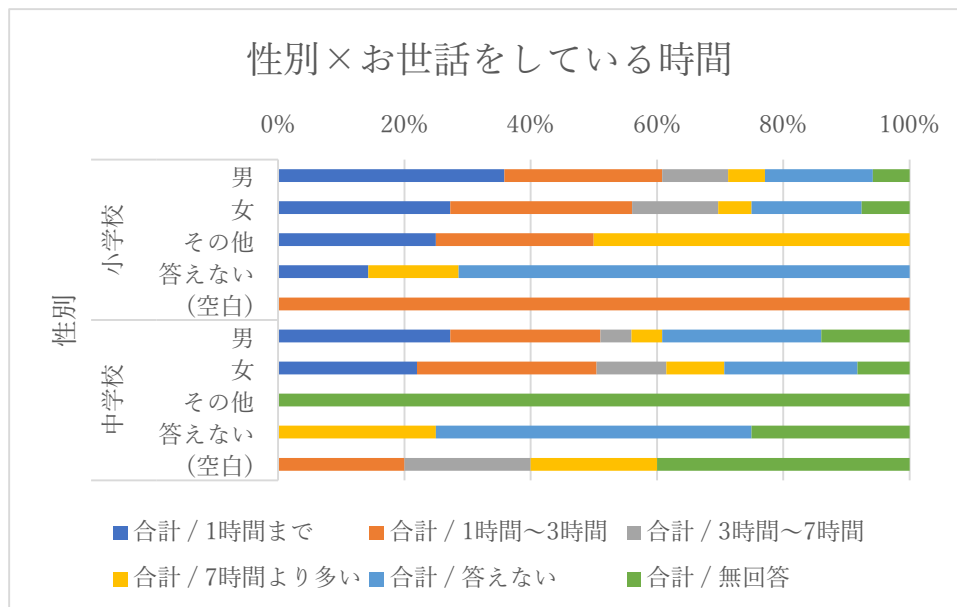
4.3.1 性別×世話の頻度

いずれも、女性は男性と比較して「だいたい毎日」、「1週間に3～5日」の割合が高くなっています。



4.3.2 性別×世話をしている時間

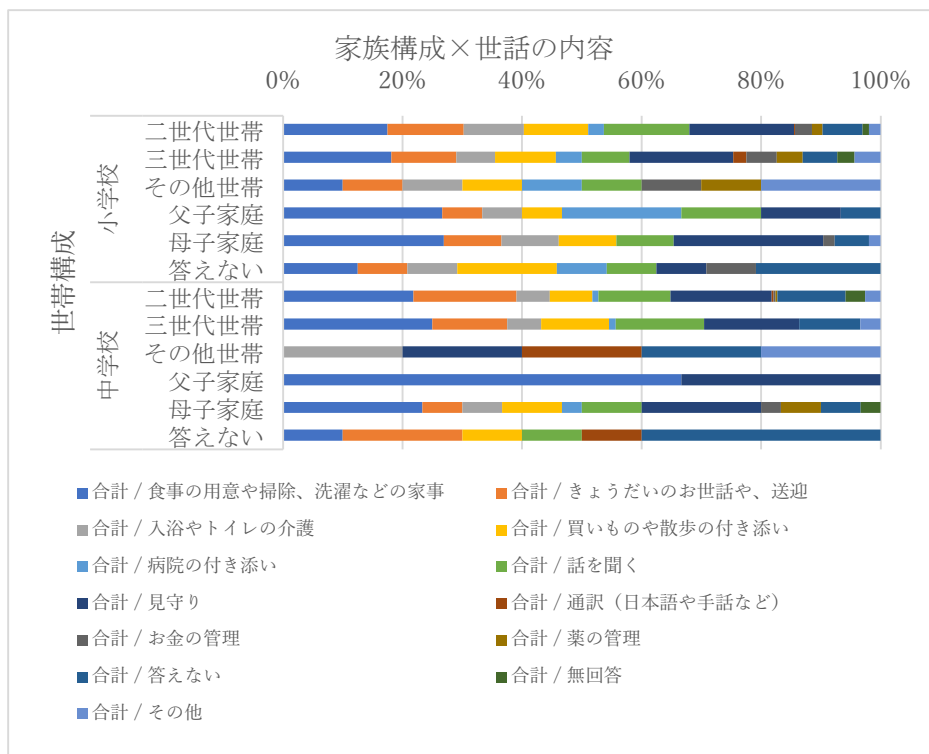
いずれも、女性は男性と比較して、世話をしている時間が長時間となる割合が高くなっています。



4.4 家族構成による世話の状況の違い

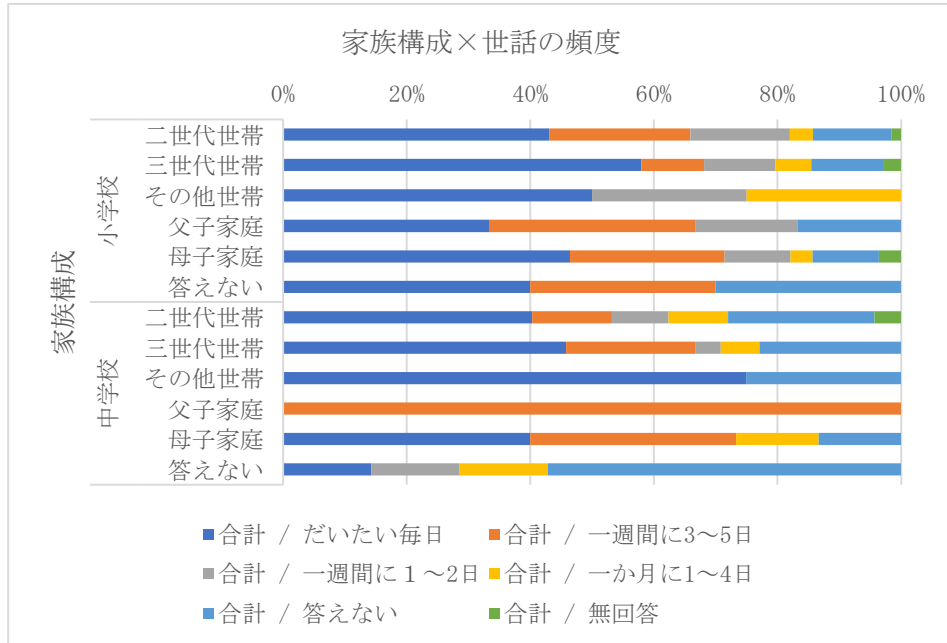
4.4.1 家族構成×世話の内容

小学生の父子家庭・母子家庭、中学生の父子家庭において「家事」、「見守り」の割合が高くなっています。



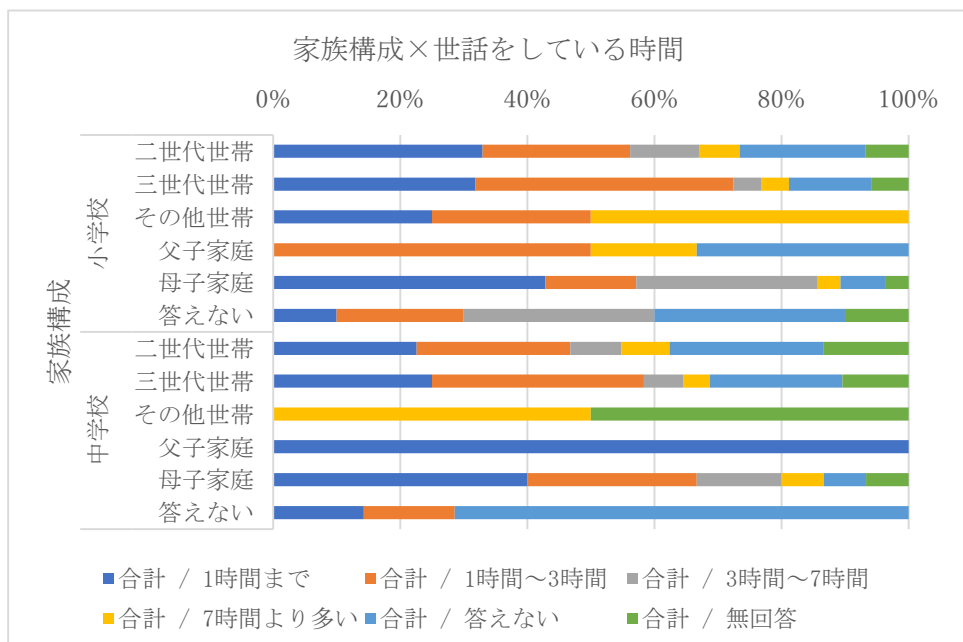
4.4.2 家族構成×世話の頻度

中学生では、父子家庭、母子家庭で「だいたい毎日」、「一週間に3～5日」の割合が高くなっています。



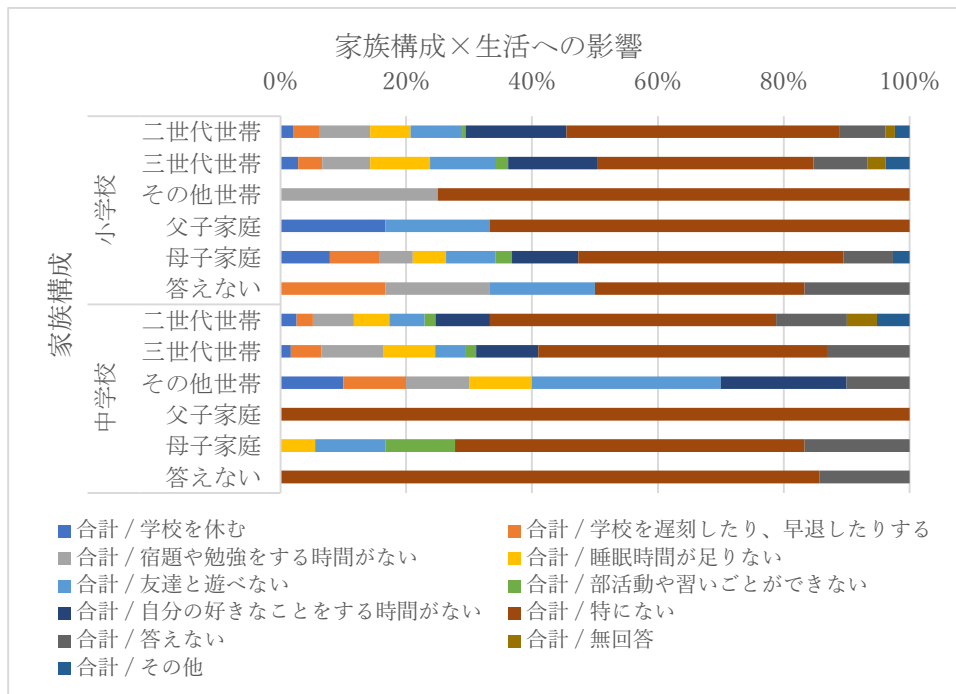
4.4.3 家族構成×世話をしている時間

いずれも、母子家庭で「1時間まで」、「3時間～7時間」の割合が高くなっています。



4.4.4 家族構成×生活への影響

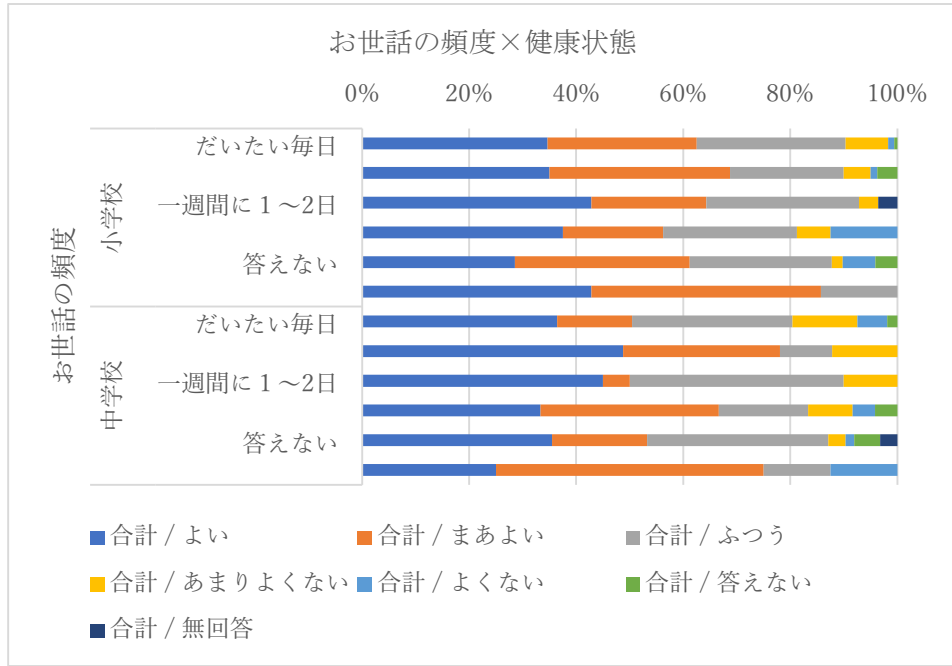
いずれも、母子家庭で「部活動や習いごとができない」割合が高くなっています。



4.5 世話の頻度による生活状況等

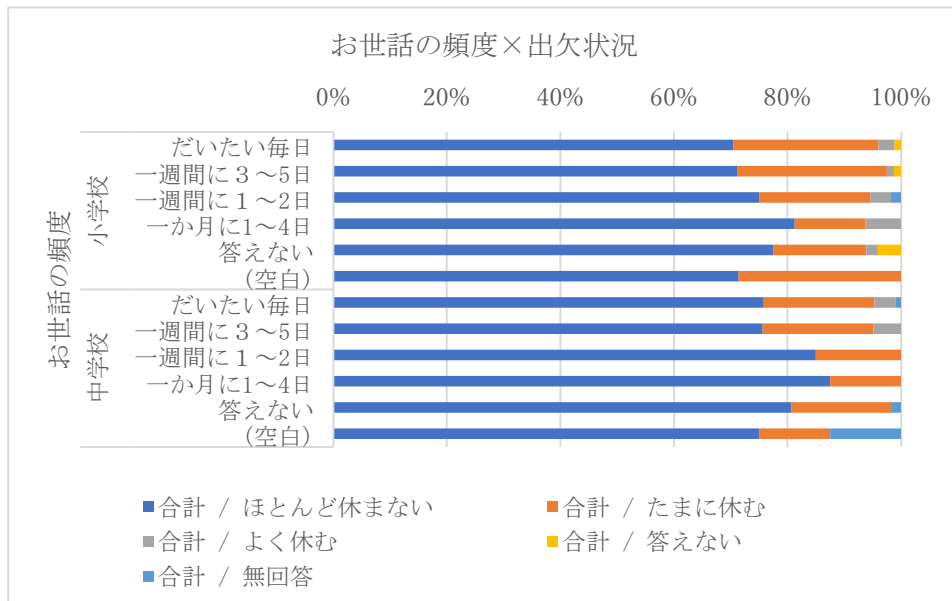
4.5.1 世話の頻度×健康状態

いずれも、「だいたい毎日」、「一週間に3～5日」と回答している児童は「あまりよくない」、「よくない」と回答している割合がやや高くなっています。



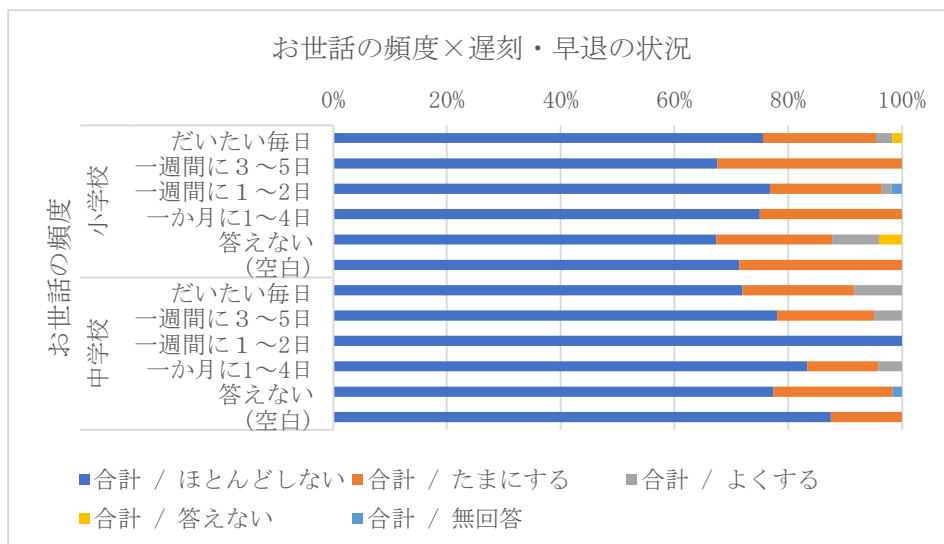
4.5.2 お世話の頻度×欠席の状況

いずれも、「だいたい毎日」、「一週間に3～5日」と回答している児童は「たまに休む」、「よく休む」の割合が高くなっています。



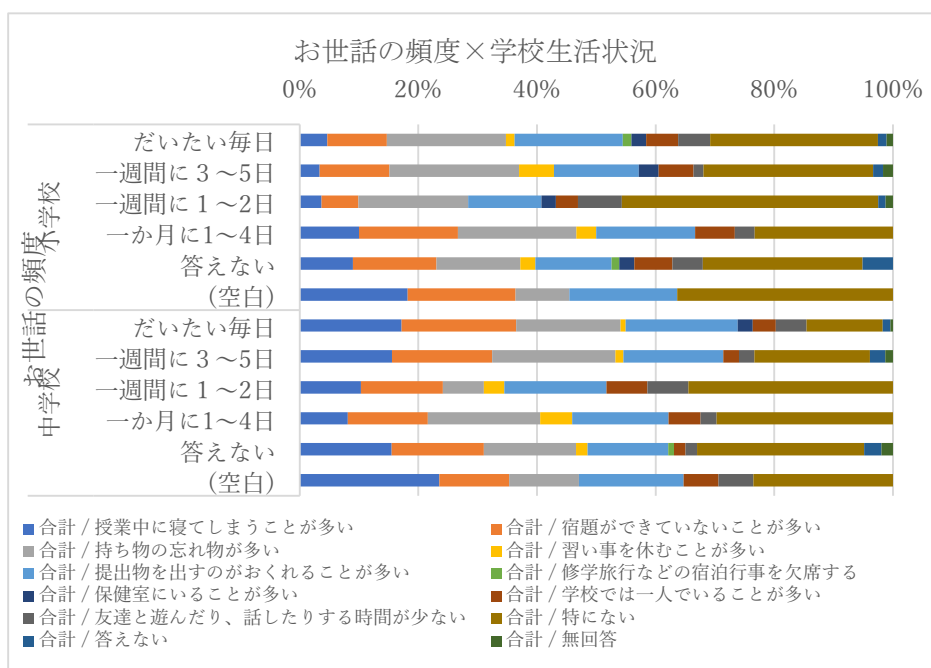
4.5.3 世話の頻度×遅刻や早退の状況

いずれも、「だいたい毎日」、「一週間に3～5日」と回答している児童は「たまにする」、「よくする」の割合が高くなっています。



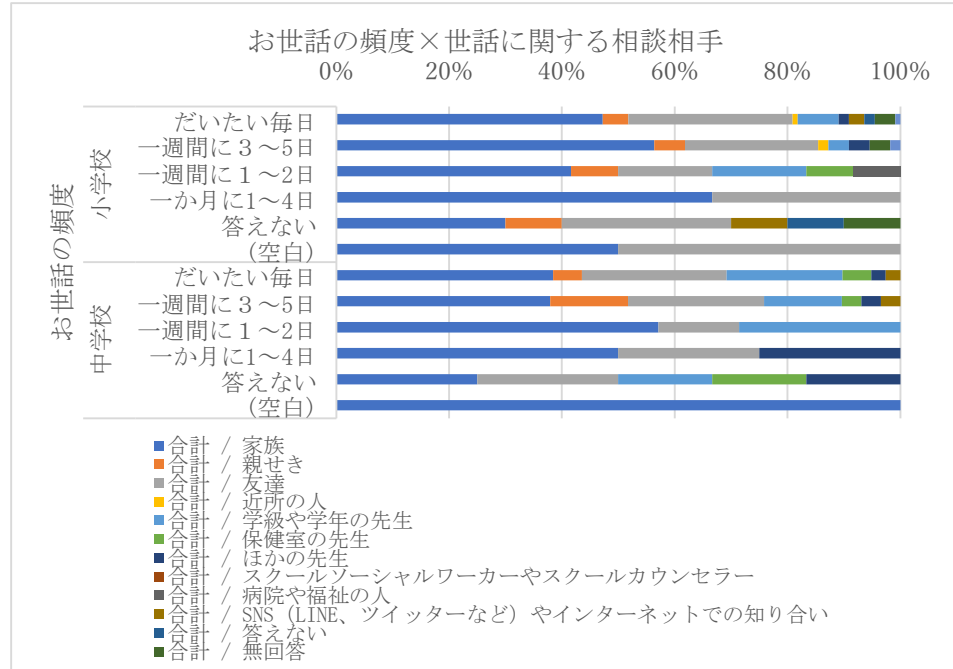
4.5.4 世話の頻度×学校生活などで当てはまること

いずれも、「だいたい毎日」、「一週間に3～5日」と回答している児童は「特にない」の割合が低くなっています。特に中学生では、お世話の頻度が上がるにしたがい「授業中に寝てしまうことが多い」、「宿題ができていないことが多い」の割合が高くなります。



4.5.5 世話の頻度×世話に関する相談相手

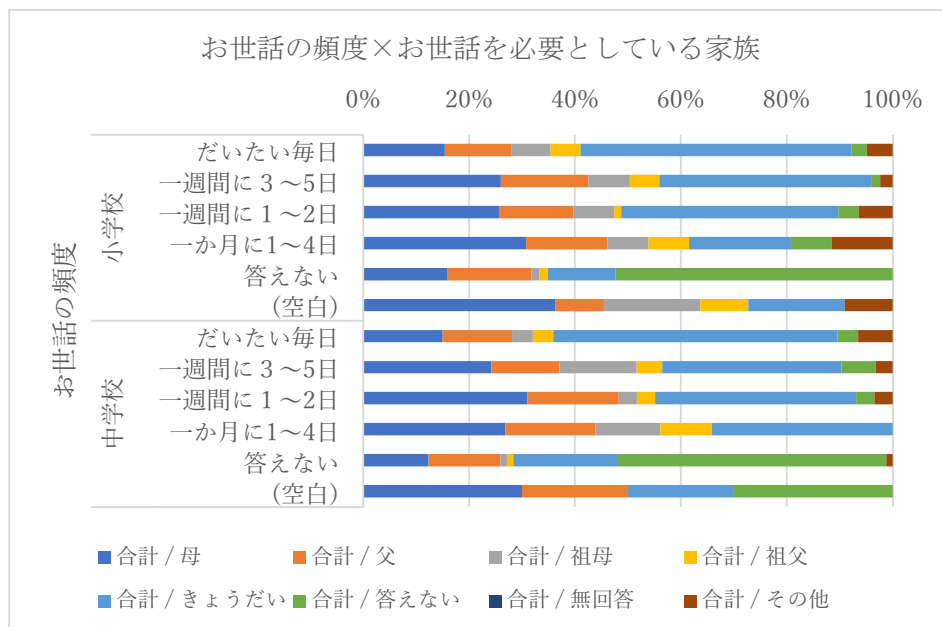
いずれも、お世話の頻度が高くなると、「保健室の先生」、「ほかの先生」に相談する児童が現れています。



4.6 世話の頻度による世話の状況等

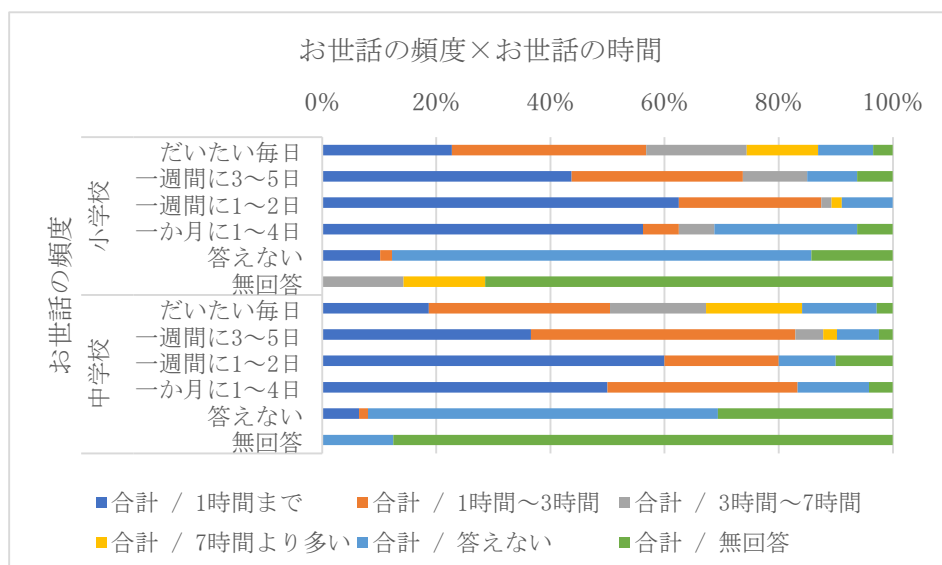
4.6.1 世話の頻度×世話を必要としている家族

いずれも、世話の頻度が「だいたい毎日」の場合、「きょうだい」の割合が高くなっています。



4.6.2 世話の頻度×世話の時間

いずれも、世話の頻度が高くなるほど、世話の時間が長時間となる割合が高くなっています。

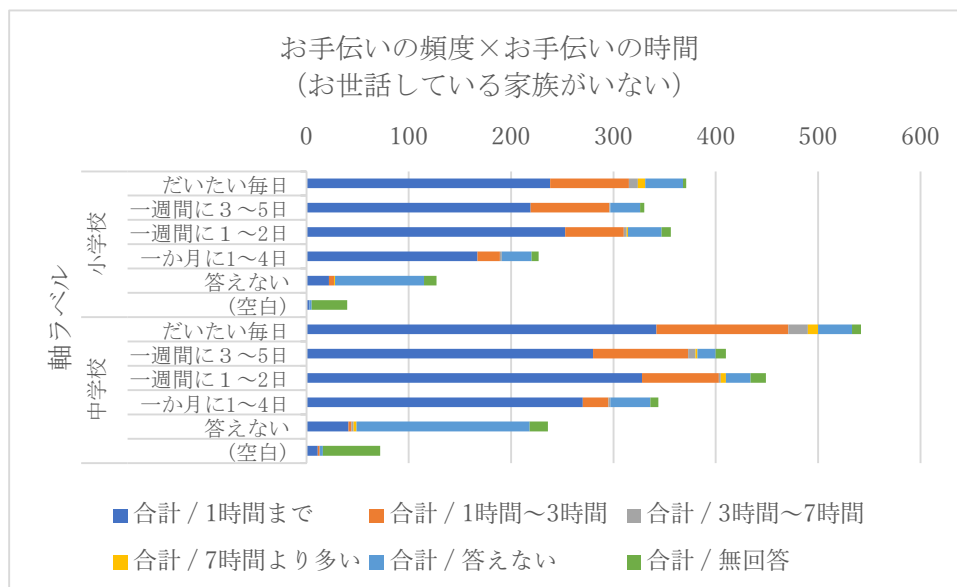
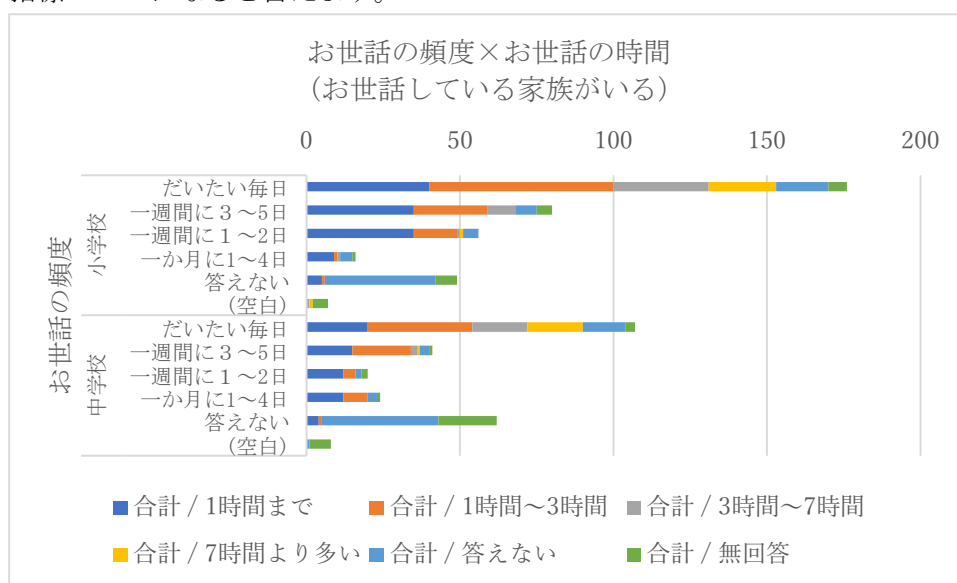


5 調査結果の考察

5.1 調査結果のまとめ

5.1.1 お世話とお手伝いの頻度と時間

お世話の頻度が週3日以上と回答した割合は小学生13.2%、中学生6.2%でした。また、以下に示す「お世話（お手伝い）の頻度×お世話（お手伝い）の時間」を見ると、お世話している家族が「いる」児童では、「いない」児童と比較しお世話（お手伝い）の頻度において「だいたい毎日」と回答している割合が多く、またお世話（お手伝い）している時間も長時間となる傾向がみられることから、お世話の頻度と時間の長短はヤングケアラーを発見する指標の一つになると言えます。



5.1.2 お世話が必要な理由が「わからない」

お世話が必要な理由が「わからない」と回答した児童の割合は、小学生 14.6%、中学生 16.4%であり、状況がよくわからないまま家族の世話をしている児童がいることが分かります。

令和3年度の国調査においても、児童自身も状況を把握していないことが周囲の大人に相談しづらい要因の一つと考えられることが指摘されており、周囲の大人が児童の置かれた状況に気づくことが必要です。

5.1.3 お世話が必要な家族の有無による生活等への影響

児童の主観による心身の健康状態は、お世話が必要な家族の有無により大きな差はありませんでした。一方、学校への出席状況、遅刻・早退の状況では、お世話している家族がいる児童の方が欠席、遅刻・早退ともに「たまに休む(する)」、「よく休む(する)」の割合が高くなっています。特に「よく休む(する)」と回答した割合は、お世話している家族がいる児童が2倍程度となっています。

また、学校生活においては「宿題ができていないことが多い」、「提出物を出すのが遅れることが多い」と回答した割合が高くなっています。

さらに、現在の悩みごとでは「生活や勉強に必要なお金のこと」、「自分のために使える時間が少ないこと」の割合が高くなっています。

以上の原因の一つとして、お世話している家族がいる児童は学校外(家庭)での支援や児童が自分のために使える時間が少ないことが考えられます。また、学校の出欠状況や宿題などの提出状況が、ヤングケアラーを発見するためのサインとなると考えられます。

5.1.4 性別とお世話している家族の状況

男性の方がお世話している家族がいると回答している割合が高い一方、お世話の頻度が高く、お世話に係る時間が長いと回答している割合は女性の方が高くなっています。

5.1.5 家族構成とお世話の状況

家族構成毎のお世話している家族がいると回答した児童の割合は、小学生の父子家庭を除き大きな差はありませんでした。なお、父子家庭については、小・中学生共に母数が少なくなっています(小学生12人、中学生17人)。

また、推計値ですが、きょうだいの人数が増えると、お世話している家族がいると回答する児童の割合は高くなります。

その他、世話の内容、頻度、時間は、ひとり親家庭でお世話の頻度がやや

多くなる傾向があるものの、家族構成により特徴的な違いはみられませんでした。

5.1.6 お世話の頻度による生活への影響

お世話の頻度が週1日以上ある児童では、お世話の頻度が上がるほど健康状態が「あまりよくない」、「よくない」と回答する児童の割合が高くなる傾向です。また、学校の出欠状況、遅刻・早退の状況でも、世話の頻度が高くなるほど、欠席したり、遅刻・早退したりする頻度が高くなる傾向にあります。学校生活状況においても、お世話の頻度が上がると影響が「特にない」と回答している割合が低くなり、特に「宿題ができていない」、「友達と遊んだり、話したりする時間が少ない」と回答している割合が高くなっています。

また、何らかの影響があると答えた児童（学校生活状況の影響が「特にない」以外を選択した児童）は小学生130人、中学生66人で、お世話している家族がいると答えた児童の約3割になります。

以上のことから、お世話の頻度が高くなることにより、生活状況に影響を与えることが確認されました。

5.1.7 お世話の影響についての実態と自覚の違い

すでに記載しましたとおり、お世話している家族がいる場合は生活に影響が出ていることが確認されましたが、次に示すとおり児童本人は、お世話による負の影響に気づいていない可能性があります。

設問内容や回答方式が異なることから単純比較には注意が必要ですが、「友達との遊び」の回答を除き、実態（普段の生活に当てはまること）と自覚（世話をしている中で経験したこと）では、自覚が薄いことが推測されます。

このことが、ヤングケアラーが表面化しない、当事者が相談しないことの一因となっていると考えられることから、周囲の大人が児童の様子から家庭の状況を推測し、その困難やニーズを把握する必要があると言えます。

お世話の影響による実態と自覚の差異

	普段の生活に当てはまること	世話をしている中で経験したこと
欠席の状況	小学生 よく休む 2.6% たまに休む 23.2% 中学生 よく休む 2.3% たまに休む 17.9%	小学生 学校を休む 3.6% 中学生 学校を休む 3.1%
遅刻・早退の状況	小学生 よくする 2.6% たまにする 22.9% 中学生 よくする 4.6% たまにする 17.2%	小学生 遅刻や早退をする 6.0% 中学生 遅刻や早退をする 3.8%
睡眠関連	授業中に寝てしまうことが多い 小学生 8.3% 中学生 29.8%	睡眠時間が足りない 小学生 8.9% 中学生 7.6%
宿題について	宿題ができていないことが多い 小学生 16.9% 中学生 32.4%	宿題や勉強をする時間がない 小学生 10.7% 中学生 8.4%
友達との遊び	友達と遊んだり、話したりする時間が少ない 小学生 7.3% 中学生 7.6%	友達と遊べない 小学生 11.7% 中学生 8.0%

5.1.8 周りの大人にしてほしいこと

「特にない」との回答が最も多かったものの、それを除くと「自分の話を聞いてほしい」、「自由に使える時間がほしい」、「勉強を教えてほしい」との回答が多くありました。これを踏まえると、児童本人の話を聞いたうえで、負担軽減を図る支援を行う必要があると考えます。

5.2 総括

今回の調査で、彦根市においても家族のお世話をしている児童が一定数いるこ

と、および、その中にはお世話が常態化することで、生活に影響が出ている児童がいることを確認できました。

併せて、お世話する頻度が高いほど、お世話をする時間が長くなる傾向がみられたことから、児童が家族のお世話を抱え込んでいる状況があると推測されます。

また、お世話している家族の有無の割合は家族構成により大きな差がなかったことから、ヤングケアラーは、あらゆる形態の家庭に生じる可能性がある問題との認識が支援者に必要です。

次に、お世話している児童の生活上の影響では、欠席、遅刻・早退が多いことや、宿題ができない、忘れ物が多いといったものが多くみられました。さらに、これらの影響について、児童本人が家族をお世話していることによるものという認識が低いことも分かったことから、周囲の大人が、いわゆる「困った子」の背景にある家庭が抱える困難に気づき、支援につなげる体制を作っていくことがヤングケアラー支援に必要なことであると言えます。

加えて、支援の実施に当たっては、児童自身の希望として「世話を代わってほしい」よりも「自分の話を聞いてほしい」が大幅に多いことから、支援の導入に当たっては、児童の話を聞き、その気持ちに十分に寄り添った上で、実際の世話の軽減につながるサービス等につなげることが重要であると考えられます。このことを踏まえ、本市における支援制度の設計と導入に当たっては、先行事例の研究や当事者のヒアリングを行うなどの十分な準備を行うとともに、導入後においても綿密な評価と見直しが必要であると考えます。

5.3 今後の取組と課題

5.3.1 支援策の検討

お世話の頻度のみで支援の要否が判定されるものではありませんが、本市においては「お世話の頻度」が週3日以上である児童とその家庭を支援対象と想定し、支援策の検討を進めることとします。

5.3.2 児童向け啓発と相談対応

調査の結果、お世話している理由が分からないといった児童やお世話による自身の生活への影響の自覚が薄い児童がいることが確認できたことから、引き続き周囲の大人への相談を促す啓発を継続していく必要があります。

一方で、家族、友達以外の大人に相談することの不安や難しさがあることも推測されることから、効果的な啓発や相談対応のあり方にはさらなる研究が必要です。

5.3.3 支援者（周囲の大人）向け啓発

ヤングケアラーである児童自身からの相談は難しいと推測されることから、その把握と支援の開始には、支援者（周囲の大人）が児童の生活状況等から家庭での困りごとに気づく必要があると言えます。また、児童自身は実際の支援よりも自分の話を聞いてほしいと考えている者が多いことから、支援者が急に介入しようとすることでニーズのミスマッチにより支援効果が発揮されない可能性もあり、児童に寄り添った対応が求められます。

そのためには、学校や地域を含めた大人がヤングケアラーの実態を知ることが重要であるため、広報ひこねやホームページでの啓発に併せて関係機関向け研修の検討や出前講座の実施に取り組みます。

5.3.4 高校生以上に相当する年齢層への調査

高校生や大学生に相当する年齢層では、小中学生と比較して担える世話の種類や程度が大きくなること、自立に向けた進路選択を行う時期であることから、今回調査の結果とは違った困難を抱えている可能性があります。今回の調査は彦根市が単独で行ったため、調査対象を市立小中学校在籍児童に限定しました。本市としても高校生以上に相当する年齢層への調査・支援の必要性について認識はしているものの、単独では有効な調査が困難であることから、県などによる広域調査の実施が必要であると考えます。